夏旅 2022 台湾　～アナザースカイへのお誘い～　（その 3）

佐伯　順弘

DAY4（16AUG2022）台中，環球科技大学

0630 起床。体調は悪くない。旅のルーティンに入る。ビタミン剤・整腸薬と水を摂取し，腸の蠕動運動を促す。排便，シャワー，身支度を素早く終え，レストランに行くとまだ，メンバーは来ていないようだ。夕べは遅くまで話でもしていたのだろうか。その頃，４人のメンバーはミーティングを行っていた。

「今日はこれから環球科技大学にいってネオさんを始めとする大学生と交流するけど，食事したり，お茶したりすると思うんだよね。そのとき，向こうの学生の分も払った方がいいかな。」

「うぅん，どうだろう。台湾では飲食の支払いは一人で行うって聞いたけど。」

「割り勘とかしないの？」

「そうなんだって，日本みたいにテーブルとかレジとかで，みんなから集金とかすることはないみたいだよ？」

「夏休みなのに，わざわざ大学に来て，私たちと交流してくれるんだから，それに対する気持ちとして，私たちが払った方がいいんじゃないかな。」

「だから，いくらかお金を集めて，１人が持っていて，それで台湾の学生の分も払った方がいい感じだったら，そのお金から払うってことでどうかな。」

「いいんじゃない。」

「うん，いいと思う。」

「じゃ，メイよろしく。」

「わかった。一人いくらにする？」

「贅沢しないとして，昼食，おやつ，夕食それぞれ 500NT$以下かな。500×3 で 1500NT＄。西螺老街まで一緒に行ってくれる向こうのメンバーは４人だってコハから聞いているから私たちの分を合わせて１人 3000NT$でいいと思う。」

「はぁい。」

「あ，もう 15 分も過ぎてる。急いで行かなきゃ。」

そういうわけで，４人のメンバーは若干遅れて，レストランに到着した。

「佐伯さん，遅れました。」

「いやいや，きっかりに来いとかじゃないから，問題ないよ。芽衣ちゃん，なんかあった？」

「今日の大学生との交流について打ち合わせしていました。」

「大切なことだよね。小晴ちゃん，向こうは何人来るんだっけ？」

「台湾の学生は４人来てくれることになっています。みんな夏休みで遊びやアルバイトで忙しいと思うのに，時間を作ってくれたんです。1100 に大学の正門で待ち合わせです。」

「まだ，0730 にもなっていないけど，できれば，コンビニで悠遊カードチャージして，0830 の列車に乗りたいから，0810 ロビー集合でどうかな。」

「大丈夫です。」

「ゆりちゃん，すずちゃんも問題ない？」

「もちろんです。」

あと 40 分以上もあるので大丈夫だろう。自分もそうゆっくりはしていられないが，余裕を持って準備する。台中站は近いし，コンビニを回っても 15 分もかからない。大丈夫なはずだ。

近くのテーブルに４人が座り，少し話しながら朝食を終えた。

「それじゃ，お先に。」

食事をとる４人を残して部屋に戻り，早めに出発の準備にかかったが，集合時刻まで 20 分もある。しかし，ここでのんびりしすぎるとこちらが遅刻することになる。早めにロビーに向かうことにした。なんと，４人はそろっていた。

「うわっ，早いね。」

「台湾の大学生を待たせるわけにはいかないんで。」

日本から台湾への留学生であるネオさんと頻繁に連絡をとっている小晴ちゃんが生真面目な顔で言った。

「そうだよね。少し余裕をもたせてあるけど，乗り換えのある約２時間の移動，何があるかわからないからね。早めがいいね。さあ，行こうか。」
0755 列車の時刻には 30 分以上もあるが，出かけることにした。コンビニでの買い物時間も少し長く確保できそうだ。ホテルを出てすぐのところにある「全家（ファミリーマート）」に入った。
「ちょっと買い物の時間が取れそうだね。それから，悠遊カードにチャージしておいてね。」
「はぁい。」
　４人は素早く買い物に散った。
　一番にレジに向かったのが，ゆりちゃんだ。
「我 要 加值 500 塊（ウォ ヤオ ジャージー ウーバイ クワイ）」
「ゆり，いつから話せるようになってたの？」
　芽衣ちゃんが本当に驚いた顔で聞いた。
「今朝，おすずがシャワー浴びている間にこっそり練習したんだよ。」
「今日は確実にチャージすると思っていたから，ピンポイントで力を入れて練習したんだよ。」
　二人のやり取りを聞きながら，やはり言語は必要に迫られた時，身につけていくものなのだと，改めて思った。
「500 元チャージお願いします。」
　小晴ちゃんは普通に日本語で話しかけていた。
「500 元ですね。わかりました。」
　店員さんも普通に日本語で返していた。
「うわぁ，日本語上手ですね。」
「ありがとう。日本語勉強しています。」
　そうなのだ。台湾の若者で日本語を勉強する人は少なくない。街中で日本語が通じることもないことはないのだ。
「そろそろ行こうか。」
　余裕をもって声をかけた。みんな買い物を終えていたようだ。台中站まではすぐである。悠遊カードだから，すぐ改札を通ることができる。電光掲示板で嘉義方面の乗り場を確認して，ホームへ移動。予定通りである。
0834 台鐵「台中站」発 2123 号　嘉義行き乗車。もう台湾の鉄道も慣れたものだ。先ほど全家で 500NT$チャージしたから，交通費は大丈夫なはずだ。平日朝少し遅い時間のローカル線である。適度に空いていた。ボックス席に４人が座り，その横のボックスに席を確保した。１時間半程度の列車の旅である。台鐵は MRT（地下鉄）と違って，飲食可なので，さっそく飲み物とお菓子を片手に女子トークが始まった。それから，今日これからの予定の確認もだ。
「で，予定通り環球科技大学まで一緒にいって大学を少し見学したら，後は４人で冒険するってことで大丈夫だよね。」
「ちょっと心配だけど。うぅん，行けます。」
「大丈夫だよ，メイ。台湾の大学生の中には日本人も一人いるから問題なし。」
「コハが教えてくれたから知っていたけど，他の人とのコミュニケーションはどうしたらいいのか・・・。」
「えっ，メイは中国語予習してこなかったの？」
「少しはしてきたけど，使ったことないから。おすずは自信ある？」
「たぶん行けると思う。理由はないけど，コミュニケーションは文法ではなく，心が一番大切だから。」
「そうはいっても，よく使う言葉くらいはおすずも憶えたんでしょう？」
「そういう，ゆりはさっきのコンビニでかっこよくチャージしていたよね。」
「おすず，その辺りは基本だから。」
「うわぁ，どうしよう。」
「大丈夫だよ，メイ。わたしもチョンゴゥファイィテンテンだから。」
「コハ，中国語しゃべってる。」
「芽衣ちゃんも中国語会話集持ってきたんでしょ？」
「もちろんです。佐伯さんおすすめ JTB パブリッシング出版のタビトモ会話台湾を持ってきました。」
「それをもっていれば，大丈夫だから。あとは手振り身振り，ボディランゲージで台湾を旅しよう。」
　そんな話をしていると，向かいの席に座っていた年配の男性に話しかけられた。

「日本人ですか。」
「そうです。これから斗六の環球科技大学まで行くんです。」
　中国語と筆談と英語を混ぜて，まったくかっこよくない感じで答えた。その男性は，日本語と英語が少し話せた。話しているうちに，少しの間，その場で中国語講座が開かれた。突然，遠い昔の出来事がフラッシュバックした。まだ大学生の頃，一人で中国を旅した。その時も同じことがあった。筆談で話したりしている内に，なぜか中国語講座が始まり，発音も直され，私の中国語の発音は台湾のそれではなく，大陸のそれになった。こういうことも旅の楽しみの一つだ。実は旅先での中国語講座は何度も経験している。上手でなくとも，一生懸命話すとき，相手は聞こうとしてくれる，そして助けてくれる。フランスでさえ，語学講座を経験している。
　４人のメンバーも積極的に質問したり，会話をしたりしている。こういうのがいいんだよ。彼女たちに旅の楽しみの大切なところを一つ味わってもらえたような気がした。
　年配の男性は１時間ほど後，降りて行った。４人のメンバーは「謝謝你」と自然に，言えるようになっていた。
0957 台鐵「斗六站」到着。列車の中で地図を確認し，迷わず移動できるよう準備。素早く動いて，徒歩２分でバス停に到着する。
1002 バス停「斗六車站」発。
1009 バス停「国立雲林科技大学」着，乗り換え。
1017 バス停「国立雲林科技大学」発。
1022 バス停「労工育楽中心」着。143NT$
「二時間くらい移動したね。」
　と，期待にあふれた表情でバスを降りた小春ちゃん。
「なにこれ，白鳥？ガチョウ？のオブジェ？台湾で至る所にアートがあるね。」
　と，辺りの探索に余念がない芽衣ちゃん。
「空が広いなぁ。」
　と，見上げるすずちゃん。
「ほんと，高い建物がほとんどないね。」
　と，ずいぶん都市部から離れたことを確認するゆりちゃん。
　バスを降りたら，南東の方角へ県道 154 乙線をそのまま進むと，150m も行かない内に「環球科技大学」の看板が見えてきた。そして，守衛さんがいると思われる建物の近くに学生が数人集まっていた。
「コハ，11 時に待ち合わせだったよね。」
「さっき，1030 頃，到着ってメールした。」
「あ，手を振ってる。」
　小晴ちゃんが走り出した。それにつられて，みんな走り出す。仕方なく，走るものの息が切れているのを悟られないようにほどほどの速度で走った。
「你好，えぇっと，こんにちは。東京学芸大学から来ました。小晴です。」
「同じく，芽衣です。」
「同じく，すず香です。」
「大家好，我是 Yuri。認識你很高興。（みなさんこんにちは，私はゆりです。お会いできて嬉しいです。）」
『おおっ。』
　最後の歓声はもちろん日本側から出た歓声である。
「你好，我是佐伯順弘。今天我是一名導遊。（こんにちは，私は佐伯順弘です。今日はツアーガイドです）」
　ゆりちゃんが，中国語で話したので，急遽，無理して中国語で話してみた。通じたかどうかは不明だが，気持ちは汲み取ってもらえたようだ。こういうところで余計な見栄を張るものではないが，そこは立ち向かうしかないのだ。
「こんにちは。環球科技大学へようこそ。私は日本人留学生，ネオです。皆さんとよい時間を過ごしたいと思っています。どうぞよろしく。」
『よろしくお願いします。』
　環球科技大学の学生がネオさんを含めて 15 人。夏休みだというのに，こんなにも集まってくれて，ありがたいことである。
　まずは，ネオさんをメインの解説者に大学構内の見学である。このセクションだけは一緒に参加させてもらうことにした。海外旅行の時に時々現地の学校を見学させてもらうことがある。もちろん，アポなし，飛込みなので断られるこ

とが前提なのだが，アジアの国々ではほぼ許可された。同じアジア人というのもあるかもしれない。礼儀正しく，丁寧に説明しているのも要因であろう。

さて，今回は既に見学の段取りもつけてある上での訪問なので，断られるかもしれないという状況ではないので安心だ。この環球科技大学は台湾の私立大学だけあって，施設・設備がかなり整っている。一般的に私立の方が授業料は高いが施設・設備はよい。台湾の学校も同様の傾向があるのかもしれない。素晴らしく充実した施設・設備の中で学べることは良いことだ。郊外にあるので，周りには高い建物がほとんどない。道も広く，何から何までゆったりとしている。駐車場にもゆとりがある。もっとも，学生はバイクが多く，車で来ている生徒はほとんどいないようだ。

1992 年に設立された新しい学校だが，様々な世界大会で入賞の実績もあるらしい。観光学部，設計学部。管理学部，健康学部の４学科があり，それぞれに専門に特化した学科を持っている。さらには，2014 年には留学生をサポートするために国際学舎も作られ，日本を含めた海外から多くの留学生を受け入れている。

学生数は昼間部だけだと，2500 人ほどであまりにゆったりとしていて，広いと思っていた学芸大が窮屈に感じてしまうほどだった。

特に健康学部のバイオテクノロジー学科/生物技術系の施設には大変興味を引かれた。夏休みだというのに何人かの学生が研究に没頭していた。彼らは３年生だろうか。台湾はアメリカと同じく夏休み前の卒業式があり，その後長い夏休みを経て，9 月に始業式があるようなので，４年生はおそらく卒業しているだろう。もしかしたら，院生かもしれないし，７年生コースかも知れない。なかなか恵まれた環境だと思うが，自分だったら，海外冒険旅行に出かけたはずだ。

【2 学期制】

上学期	8 月 1 日～1 月 31 日
下学期	2 月 1 日～7 月 31 日
夏休み	7 月 1 日～8 月 29 日
冬休み	春節（旧正月）あたり約３週間

学内見学は，駆け足のような状態だったが，そうでもしないと短時間では施設を見て回れない。あっという間に 30 分以上経っていた。こうして，環球科技大学の駆け足の見学は終了した。

「ありがとうございました。大変興味深い見学でした。この広々とした素晴らしい環境で学ぶことのできる皆さんがうらやましいです。これからもそれぞれの目標実現のために充実した時間を過ごせることを祈っています。また，これからの学芸大学生との交流が有意義なものになること期待しています。それでは，学大の学生諸君，頑張ってくれたまえ。」

昼前に学芸大の学生たちと分かれて，午後は単独の動きとなった。

＊　＊　＊

1130 私的日台学生交流団は，昼食を兼ねた交流会を行うため学内のレストランへ移動した。

「すごいね。なんか学内に本格的なホテルレストランみたいなのがあるって。」

小晴が前方の建物を見ながら言った。

「そうだね。やっぱり，実習施設なのかな。」

芽衣は学大の環境教育実践施設を思い浮かべていた。

「芽衣さん。」

ネオが話しかけた。

「あ，芽衣でいいです。芽衣って呼んでください。」

「じゃあ，私のことはネオでいいですよ。台湾では年上年下とか先輩後輩の垣根が低い傾向があって，みんな敬称略で呼ぶんです。」

「えぇっ，そうなんですか。」

「そうなんですよ。それから，これから行くレストランはレストラン学科のトレーニング施設でもあるんです。」

「すごく実践的な学習をしているんですね。」

小晴が感心しながら言った。

「あ，小晴さんは何と呼べばいい？」

「コハでお願いします。普段そう呼ばれているので。」

「私はゆりで。」

「私はおすずと呼んでください。」

それほど親しくなった状態ではないはずだが，４人は積極的に間を詰めようとしていた。

レストランのウェイティングルームでは，早くも賑やかな交流が始まった。自然と自己紹介タイムに入っていた。4 人は改めて，呼んでほしい名前を含めた自分の情報を開示していった。また，ネオを含めた台湾の学生 15 人もそれぞれ自己紹介をした。

「台湾の人はイングリッシュネームをもっている人が多いって聞いていましたけど，本当に多いですね。」

小晴がリラックスした感じで話し始めた。

「そうです。小学生になる前から英語を学習して，その時に英語の先生にイングリッシュネームを付けられることが多いです。」

これまた，流暢な日本語で話してくれたのは先ほどの紹介でジャスミンと名乗った子だった。

「それに，イングリッシュネームの方が，英語の先生に覚えてもらいやすいから。」

この子はアリス。

ほどなく，レストランホールに通されると，そこには立食形式で食事の用意がされていた。どれも一流のホテルのそれと言われても納得する豪華な料理に，４人のメンバーは言葉を失っていた。この大学には観光学部があり，その中にはホテル関連, レストラン関連の学科がある。今回は公式の学芸大からの訪問ではないのだが，小晴とネオが連絡を取り，先ほどのネオの説明の通り学科生の練習も兼ねて，特別に用意してもらったのだ。歓迎を表すプレートも掲げられていた。

「すごっ，すごいです。」

「写真撮っていいですか。」

台湾の学生もこういう場面にはあまり出くわしたことはないようで盛り上がっていた。

その盛り上がりをいったん収めたネオと小晴が司会的な役割で交流会を進行した。

ネオが歓迎のあいさつ，小晴がこの交流会が開催されることになった経緯と歓迎に対する感謝を述べた。既に自己紹介は済ませていたが，日本側１人ずつ簡単なスピーチをした。

「さぁ，皆さんいただきましょう。」

ネオの言葉に，それぞれにプレートとグラス（ソフトドリンク）を持って，食べながら，話しながらの交流になった。日本の学生も台湾の学生も料理の写真だけでなく，交流の仲間との何枚も写真を撮った。さすが，冒険学校に縁のある面々だけはあり，決して日本人だけで固まることなく，それぞれが新しい友達に対して，自分の思いを自分の熱意で伝えていった。言葉の巧みさではなく，意思疎通をしたいという思いこそが大切なのだとそれぞれが実感していた。

話題も多岐に渡っていた。やはり covid-19 関連の対応や学校生活の制限, 充実具合などの話, 音楽，ファッションまで様々だ。中には台湾の若者が儲け話に乗せられて。カンボジアに渡り行方不明になっているとか，パスポートを取り上げられ強制労働させられるとかの話もでた。臓器売買に巻き込まれているという食事中にしないであろう話さえ飛び出していた。

充実した時間はあっという間に過ぎるもので，既に 1300 を過ぎていた。そろそろお開きという場面で，今回の交流会紀念のオリジナルペナントを渡した。美術科の友達のサポートも受けてなかなかのものができた。裏に 4 人の署名が入っている。また，それとは別に，同じものを 4 人それぞれが持っていて，交流会に参加したメンバーに署名をしてもらった。それから，お土産のお菓子も渡した。「気持ちばかりのものですが」という意味の「這是我一點的小心意（ジャシ ウォ イーディエンダ シャオシンイ）」を頑張って練習していた小晴が言いながら渡すと，台湾側から歓声が上がった。実はこのお土産，何にするか悩みに悩んだ。鬼滅の刃コラボお菓子「鬼滅の刃 シェアチョコモナカ」箱買いしたもの。小晴はそれから，台湾への土産ド定番の「白い恋人」箱買いしたものの 2 つだ。そのために中型のバックパックを背負っていた。アニメものという発想はあった。コラボ商品の扇子が候補に挙がっていた。軽いし，暑い台湾では重宝がられるに違いないと誰もが賛成だったが，調べてみると扇子の発音が別れの発音に近いため，今回の場合の贈り物には避けるべき物の一つだった。鬼滅の扇子で行こうと，みんな盛り

上がっていただけに，本当に危なかった。こんなところでも相手国の文化を理解することはとても大切だと思い知らされた。
「ありがとう。みんなで分けますね。ペナントはこのレストランに飾らせてもらうよう頼んでおきます。」
ネオが代表して受け取ってくれた。
その後，今回の料理を作ってくれたキッチンスタッフ，会場をセットしてくれたサーブスタッフも含めて，集合写真を何枚も撮った。
「本当にありがとうございます。忘れられない思い出になりました。いつか，日本にも遊びに来てください。」
芽衣が最後の挨拶で締めくくった。
片づけもスタッフのトレーニングだということで，そのままレストランを出た。これもまたトレーニングのためということで，アンケートをお願いされたが４人ともびっしりと書き込んでいた。できるだけ具体的によかったところを書くように心がけた。こういうところはもともと教員養成系大学として学んでいるだけあって得意分野である。とっさに講評できることも重要なスキルなのだ。
レストランの外で，ほとんどの学生は解散していった。何度も「ありがとう」と「ともだち」の言葉を残して去っていった。残った台湾の学生は４人。これから西螺延平老街・西螺大橋へ見学に行くのだ。これが当初から決まっていたメンバーだった。ジャスミン，アリス，ルークそしてネオ。
ネオは８人乗りタクシーをチャーターしていた。運転手と交渉して７人までしか乗れないのだが，８人乗せることを了解してもらっていた。
「さ，行きましょう。」
1330 タクシーは環球科技大学の正門を出発し，西螺地区へ向かっていた。ルークは男性１人だったが，明るい性格で女子トークに自然に溶け込んでいた。そんなこともあり約 40 分の移動はあっという間に終わってしまった。
到着したのは，西螺延平老街にある延平老街文化館。
「西螺延平老街に来たら，最初に「捷發乾記茶荘（ジェファ ガンジ チャチョン）」に行きましょう。延平老街文化館として知られているところです。ここで延平老街の全体像をつかみましょう。」
ネオの案内で，延平老街文化館に向かう。
西螺は台湾の中部，雲林県の北部に位置し，台湾を代表する米どころとして知られている。また，美味しい米と手作り醤油で知られる地方都市でもある。ここには戦前に整備された昔ながらの商店街が残っており，「延平老街」と呼ばれている通りに保存されているという。
その一つがここ「西螺延平老街文化館」である。西螺の歴史や文化を伝える郷土資料館として利用されている。日本との関わりでは，台湾でもっとも長い歴史を誇る西洋薬局といわれる良星堂が挙げられる。日本の星製薬商業学校(現・星薬科大学)で学んだ程日良氏が西螺に戻り，開業。その後，甥の程光輝氏が継ぎ，さらに現在はその子・士晋氏に経営は移っているという。星薬科大学の創設者の星一氏のモットーは「親切第一」。士晋氏は「この言葉は，いまも私の店の大切な精神です」と語る。驚いたことに，ＳＦ作家の星新一は，星一氏の息子であるとのこと。読書家の芽衣の瞳がキラリと光ったことには誰も気づかなかった。
延平老街文化館で延平老街の歴史や周辺事情について学んだ一行は出口まで来た。
「おおっ，レンタサイクルがあるよ。これで街を走って見学しよう。」
台湾のレンタサイクルに興味を持っていた小晴がノリノリで提案した。ジャスミンとアリスがさっと手続きをしてくれて，８人は自転車にまたがり颯爽と走り出した。
「なんか，いい感じの街並みだね。」
すず香がうれしそうに言った。
「そうだね，ヨーロッパ建築とも日本建築とも言えない感じ。いろいろなものを取り入れた感じだね。」
ゆりも周りを見ながら言った。
「なんか，映画のロケ地になりそうなところだね。」
芽衣も興味深そうに言う。

「台湾で2013年に製作された『天台 Rooftop』っていう映画のロケ地になったことで話題になって，台湾の人にも人気のスポットなんだよ。」
「えっ。コハはそれを知っていて，ここを見学地に選んだわけ。」
「もちろんだよ。日本との関わりを知ることも大切だけど，今の台湾の若者にどう感じられているかってのも大切だから。」
「ところで，その「天台」っていう映画はどんな感じなの？」
「中華コメディアクション＆ミュージカル作品。確かにストーリーはありがちなものだけど，主人公はかっこいいし，ヒロインもかわいい。なんか，レトロな雰囲気の映画だよ。監督の周杰倫（ジェイ・チョウ）は台湾出身の歌手で俳優，映画監督，作曲も作詞もするスーパースターなんだよ。日本の漫画を原作とした，香港映画『頭文字D THE MOVIE』の主演で本格的な映画デビューしたんだよ。2005年だから古い映画だけど，DVD借りて観た。」
「うわっ，その説明的な詳しさが怖いね。」
　ゆりがうれしそうに言った。
「日本に帰ったら，観たいなぁ。ネトフリにあるかな。」
「おすずはネットフリックスなんだ。私はアマゾンプライム。」
「じゃあ，なかったら，コハのところで見せてもらうよ。」
「いいよ。うちでみんなで見よ。」
「DVDを買っていくという手もありますよ。」
　ジャスミンが言う。
「ネットで見られればいいけど，なかったらDVDはそんなに高くないから買っていってもいいですよ。」
「高くないなら，買ってもいいかも。ジャスミンはネットで見る？DVD買う？」
「断然，ネットです。でも，ネットになかったら，DVDを探します。二手店という中古ショップもあるからそこなら古いものもあるかもしれません。」
「音楽はずいぶんと前から，ダウンロード主体だって聞いたけど，映像はどうなの？映画とか見に行く？」
　芽衣は映画にも興味があるようだった。
「私はネットでみることがほとんど。だけど，アリスは映画館行くよね。」
「そうです。映画館の雰囲気が好きです。」
「そうだよね。ちょっと高いけど，映画だけに集中できるところが好き。」
「芽衣が映画好きだって知らなかった。」
　小晴が意外そうに言った。
　８人チームが自転車をこぎ出してから，暫くすると人だかりが見えてきた。どうやら食べ物屋らしい。器に白い塊，上には茶色を基調とした粘性の高い液体がかかっているようだ。そしてその液体の中には固形物が少しみられる。
　ネオは４人が興味を引かれていることに気付くとチーム全体に声をかけ，自転車を止めた。
「これはね，西螺名物の『九層粿（ジョーセンクオ）』という食べ物だよ。食べてみる？」
「もちろん。」
　小晴は即答し，他のチームメンバーも笑顔で自転車を降りた。
　ネオが慣れた話し方で８人分注文し，店内の席に座る。店内と言っても台湾はオープンカフェ状態の店が多い。席の近くを走り去るバイクの排気ガスは意外なほど気にならない。
　九層粿は日本では見たことのない食べ物。名古屋名物「ういろう」を柔らかくした感じのもちもちした食感。それに，たれをかけ，エシャロットをかりかりに揚げた物をのせている。甘い食べ物の上に揚げ？焦がし？玉ねぎのたれがのっていると表現すればよいか。何だこれは？とメンバー４人は興味津々である。量はそれほど多くないので，ちょっと食べるのには最適だ。不思議な味だが，おいしい。
「不思議な感じだけど，おいしいです。」
「なかなか日本にはない味だけど，おいしいね。」
　芽衣，小晴が口々にいった。
「次は西螺大橋を見に行きましょう。」
　８人は自転車で大橋に向かう。
　西螺大橋は，雲林県の濁水溪下流に架かる全長1,939mの小型車，バイク，自転車用の橋である。日本統治時代に建設が開始されるものの，

大戦により工事は中止，その後アメリカの支援により完成した。かつては世界で２番目に長い橋であった。
「長いですねぇ。」
　すず香が素直な感想を呟いた。
「ほんと，長いねぇ。」
　小晴も感心していた。
「なんか，この濁水渓の水って黒っぽくない？」
　芽衣が河を観察して疑問を発した。
「これは，流れの急な上流部で古代に形成された堆積岩や粘板岩の層が削り取られ，その泥粒が混ざることで全体として黒みがかった灰色になったと考えられるんだよね。」
　ゆりがさらりと言った。
「はっ？すごい。何で知っているの？」
「ちょっと気になって調べたんだよね。芽衣に驚いてもらって，調べた甲斐があったなぁ。」
　８人はそこ暫く西螺大橋を眺めた後，レンタサイクルを借りた延平老街文化館への帰途についた。
「麻糬（マーシュー）食べていきますか？」
　帰る途中，急にネオがみんなに聞いた。
「それって，西螺の名物の１つで，小さなお餅ですよね。」
　下調べをしていたのか，小晴が食べる気満々で言った。
「そうです。小さなお餅なので，お腹にまだ隙間があれば，食べられますよ。」
　ということで，食べることにした。
　入った店は「西螺麻糬大王 氷上氷 西螺老街店」。延平老街文化館の近くにあった。ひとくちサイズの餅を販売する店である。餅の種類は花生（ピーナッツ），芝麻（ゴマ），紅豆（あずき），緑豆の４種類。ピーナッツ餅は，餅のまわりだけでなく，中にもピーナッツの粉があふれている。荒く砕いたピーナッツの食感と味わいが餅に合っている。ゴマ餅は，黒ゴマの風味が濃厚で一口食べると，口いっぱいにゴマの風味が広がる。あずき餅は，やわらかい餅の中にこしあんがパンパンに入っている。甘すぎることもなく，いくらでも食べられそうである。最後に，緑豆餅だが，餅の中にはなめらかな緑豆ペーストがたっぷり。あずきと比べると甘さが強めであり，スイーツ感が強い。
　どれだけでも食べられそうだったが，さすがに控えめにして，１人１個を味わった。
「見学して，どうでしたか。」
　ネオがまとめるように聞いた。
「台湾にこんなに日本との関わりのある場所があるって実感できました。」
「台湾のそれぞれの年代の人々がそれをどんなふうに感じているのか知りたいと思いました。」
「なんか，歴史ってこういうことなんだなぁって感じました。」
「昔のものを壊してしまうだけではなくて，保存するものは保存して歴史として残しているところがいいなぁと思いました。」
　学芸大の学生は口々に言った。
「私も台湾のことを改めて見直す機会になりました。」
「いつか，日本の古い街並みも見てみたいです。」
「実はまだみたことがなかったので，映画『天台』を見て，またここに来たいと思います。」
「皆さんが楽しんでくれて，うれしいです。」
　台湾の学生も口々に言った。
「これで今回の交流見学会は終りにしましょう。ここで解散するのですが，学芸大の皆さんは台中站方面に行けますか。」
「大丈夫です。台中站に戻ります。」
「私たちはみんな斗六の近くに住んでいるので，そちらに行きます。」
『ありがとうございました。』
　学芸大の４人は北方面へ，台湾の４人は南方面へ帰る。台湾の学生はタクシーで帰っていった。学芸大の４人はまずはバスを探した。
「あ，あった。これでいけるんじゃない？」
　ゆりがいち早く検索して，見つけ出した。
「そうだね。出発まで時間がない。どっちにはしればいい？こっち？」
「おすす，違う。こっち。」
「走ろう。」
　芽衣が駆け出した。意外と近いところにバス停があり，まだバスは来ていなかった。４人は息を整えつつ，暫しバスを待った。定刻にバス

は到着し，乗り込むとバスは4人が近い席で座れるくらいは空いていた。
1552 バス停「西螺転運站」発 9016B 台中車站
　バスの中では4人とも疲れたのか，無言で，いつの間にか，それぞれに眠ってしまっていた。終点まで行くことはわかっていたのでそれで安心したのかもしれない。
1715 バス停「台中車站」着 120NT$
「あ，着いたよ。みんな起きて。」
　芽衣がみんなを起こした。
「ああっ？ここどこだっけ？」
「おすず，寝ぼけてないで，起きて。台中站に着いたから降りるよ。」
「あ，ゆり。降ります降ります。」
「なんかよく寝た。」
「コハ，爆睡だったね。」
「いやぁ，芽衣の肩が気持ちよくて。」
「どういたしまして。」
　4人はバス停「台中車站」で降りると，何度も通って土地勘をつかんできた道を歩いた。
「ね，コンビニでビールでも買っていく？」
「いいね。本当はパブとかバーとか行ってみたいけど，海外で知らないところはちょっと怖いよね。部屋飲みが安全かな。芽衣はビール飲む？」
「冒険学校で OB たちが勧めてくれるから，お酒は一通り飲むかなぁ。ゆりはどう？」
「私はコロナでなかなかそういう機会もないけど，いろいろ飲むよ。はっきり言って好き。」
「じゃあ，コンビニでビールを買おう。」
「おすず，なんか，張り切ってない？」
「だって，部屋に集まって，飲み会とかあまりなくない？コハは宅飲み会やってる？」
「ううん，やったことない。」
「でしょ，なんか楽しくない？」
「言われてみるとそうだね。」
「明日の予定もある人もいるだろうから，そんなに飲みすぎないように。」
「芽衣，大丈夫だって。ちゃんと芽衣がとめてくれるから。」
「コハはそんなに強くないんだよね。」
「私も冒険学校で鍛えられたかもしれない。研修キャンプなんかもあったし。」
　4人は近くのコンビニに入った。
「何これ？」
「大阪発の生食パンの店『嵜本 SAKImoto』×台湾クラフトビールブランド『金色三麥』の『極生啤酒』135NT$ってちょっと高くない？」
「酵母をゆっくり発酵させて，甘みを引き出したビールだって。蜂蜜も加えてあるみたい。」
「ちょっとこれも見て？」
「台湾啤酒・台啤微醺系列　柚子啤酒」
「アルコール度数 3.5%のほろよいシリーズだって，これはいいかも。」
「このフルーツビールもなんかおいしそう。」
「夕食もここで買ってく？」
「そうだね，今日は食べ過ぎたから軽く済ませたいね。」
「台湾に行くと太るって聞いたけど，それは真実かもしれない。食べたいものが多すぎて。」
「佐伯さんもいろいろ勧めてくるし。」
「食べられなかったら，断ればいいじゃん。」
「それができたら，簡単だっていうの。」
「断れない雰囲気とかじゃないの。とにかく，おいしそうなもの選んでくるから。」
「台湾在住の経験から，超オススメを選んでくるから勝てないよね。」
「ダイエットは日本に帰ってからということで。」
『だよね。』
　4人は，おにぎり，煮卵，サラダなどの食事，スナック類，そして，アルコール類は各自飲みたいだけ買った。台中站からホテルまでが近いのでその途中のコンビニからホテルはすぐだ。
「シャワー浴びたら，コハと私の部屋に集合で。」
『りょうかぁい。』
　4人はホテルに帰投後，シャワーを浴びて着替えてから，芽衣と小晴の部屋に集まり酒盛りを始めた。まだ時間は 1900 であった。

＊　＊　＊

　時を戻して 16AUG2022　1130。学芸大の4人と別れて，単独行動を始めていた。
　後は若い人同士で，というわけではないが，4人の学生が自分たちだけの力で（日本からの留学生も1人いるのだが），台湾の学生と交流

することが大切だと考え，別行動にした。夕食くらいは一緒に食べてくるかもしれないが，それほど遅くはならないだろう。自分たちの手に負えないくらいの事態に陥った場合，駆け付けたところでそれほど役に立つとは思えないが，連絡を受けて臨場することはできるだろう。彼女たちが日本を背負い，素直な気持ちで，相手に敬意をもって接することを確信している。だから，安心して単独行動へと向かった。

1200 環球科技大学発。旅の基本として，「空腹だから食うのではない，食いたいものがあるから食うのだ。」という行動規範を持っているので，特に 1200 だからと言って食べなければならないことはない。ありがちなものを食べて，珍しいもの，面白いものを喜びをもって味わえないなどということがあれば，旅の楽しさは半減してしまう。画像はみればいいが，味は現場で味わうしかないのだ。しかも，その時の気分や体調全てがその味に関わってくる。であるならば，空腹など問題ではない。寧ろ歓迎すべきことだ。

向かうべきバス停は先ほど下車したバス停なので迷わない。正確には降りたバス停の反対側から乗るのであるが，そんなことはバスを降りた時に確認済みである。もちろん，バックパックにある水の量や非常食の量，疲れ具合，精神の安定具合，この高度ならば 100m を何秒で走れるか。巡航速度で何時間走れるかもわかる。太陽の方向から東西南北を把握し，頭の中に鳥瞰図が描かれるように地域の状況がイメージされる。ひとまず，危険性はないことを確認した。

緊急事態ではないので，周りの情報を十分に吸収しながら，のんびりした雰囲気でバス停に向かって歩いた。そして，計算通りの時間に到着する。

1225 バス停「労工育楽中心」発　7011A 雲林 7 長庚紀念醫院行に乗車。

1335 バス停「日統客運総站」着。徒歩 3 分で台鐵へ移動。コンビニで飲料水を補給。

1252　台鐵「斗六站」発。自強号 172 花蓮行。

そのまま台中中心街に戻るわけではない。全く別の目的地に向かう。以前働いていた職場にいた台湾人の同僚が勧めてくれた「鹿港（ルーガン）」である。

鹿港は台湾西岸の中間に位置し，清の統治時代には天然の良港として商業の中心地として発展した。 1784 年鹿港と福建省泉州の間で航路が開かれ鹿港の黄金時代が始まった。当時，台南に次いで第 2 位の都市であり，人口は約 10 万いた。当時の鹿港は八大商業組織が存在し，鹿港八郊と称されていた。時を経て，日本統治時代に鉄道輸送網から外れた鹿港の経済的繁栄は終止符を打つこととなったと聞く。

今も当時を思わせる古い街並みが特徴の都市である。食についても下調べ済みで，アナジャコの唐揚げ（蝦猴酥ヘーカウソー），カキの包み揚げ（蚵仔酥オアソー），蝦団子（蝦丸ヘーオワン）が名物であり，それはマストで食さねばならぬと熱い思いを心に秘めていた。

1327 台鐵「彰化着」徒歩 3 分でバスに乗換。

1340 バス停「彰化站」発 6900 馬鳴山経由鹿港行。異国をたった 1 人で交通手段を調べつつ，旅する。この根無し草感。誰もオレのことは知らない。オレもこの土地の誰も知らない。それでも多くの人々と関わりながら旅をする。自分が生きていると強く実感する時間だ

1420 バス停「合作社」着。徒歩 300m。

1425 鹿港老街着。ここまで 192NT$。

廃墟ではない，いい具合に鄙びた感じの街である。フォトスポットが山ほどある。写真を撮りつつ，蝦団子だけはなんとか食べることができた。

歩き回り疲れて，港の見える場所に座り，水を飲んだ。異国で孤独だけど，一人じゃない。この浮遊感がたまらない。いやぁ，オレってば，なんかカッコイイ。女子大生と旅することも相当高いレベルで楽しいが，一人ぼっちも捨て難い。どっちなんだといわれても，どっちも気分がいいから，どっちも捨てられないのだ。どっちか 1 つにしろなんて誰が言ったのだ，どっちか 1 つでなければならないなんて誰が決めたのだ。両方でもいいじゃないか。いやいや，そうじゃない。2 択じゃない。2 人で旅するのも楽しい 3 人だっていいぞ。いろいろあっていいじゃないか。それでこそ，楽しめる。それでこそ，

引き出しが増える。そんなことを誰に説明するでもないが，考えていた。

いかん。帰らねば。鹿港は台中からそこそこ遠いのだ。急いで，帰るための行動に移った。

1556 鹿港老街出発。バス停まで徒歩 3 分。

1600 バス停「彰化縣鹿港地政事務所」発　9018 台中車站行。台中站まで，直通がある。これは便利。ということで，ビアホールに行く余裕ができた。そもそも，今日の夕食は一人で食べる予定だったのだから，夜遅く帰っても悪くはなかったのだが，ホテルから離れたところで，辺りが暗いのは，かなり気持ちが落ちるので，避けたかった。それを最初に味わったのは，冒険探検部で行った中国遠征の時だった。あの時の心細さと言ったら，もうカッコなどつけていられないほど心細かった。ま，そんなことは昔のことである。今は，ずいぶんと慣れたが，終バスとか終電とかは絶対に避けたい状況だ。

1716 バス停「国立自然科学博物館」着。徒歩約 1km。

1728 臺虎精釀啜飲室着。

ここは臺虎精釀（タイフ・ジンニャン）というクラフトビールメーカーが直営しているビアホールだ。日本にも神楽坂に『Taihu Tokyo / 臺虎精釀』として出店しているらしい。このビアホール，下調べ段階から，ぜひ行きたいと思っていた。ただ，あくまでも今回はガイド兼保護者役である。主な任務を放り出していくことはできないので，とりあえず頭の片隅にしまっておいただけだったのだが，流れで来ることができた。人生は素直に誠実に生きる人間に対しては時折，優しい一面を見せてくれるのだ。

ビアホールとしてはそれほど広いわけではないが，十分落ち着ける広さはある。照明も落ち着いていて，ボードに手書きのビアメニューが味わい深い。思ったより，多くの種類があるのに驚いた。これを全部飲むためにはかなり本気を出さないといけないなと 1 人考えた。カウンター席，テーブル席も 4 人掛け，6 人掛けとあり，これはメンバー4 人がその気なら連れてきたいと思った。今日は 1 人なので，とりあえずカウンター席についた。とにかくビアメニューが多い。IPA やヴァイツェンなどの他に，ベルリーナバイセ，ケルッシュ，ゴーゼ，インペリアル IPA，インペリアルスタウトのバレルエイジなどがあり，どれを選んだらよいのか迷う。ビールにはそこまで詳しくないので，これだったらもう少し勉強しておけばよかったと後悔した。とりあえず，どんなものだかわかっている IPA をオーダーした。サイドメニューはチップス＆チーズを頼んだ。

350mL ほどの丸みを帯びたグラスに，程よい量の泡と共にビールが届いた。1 人静かに，この冒険的な旅に杯を上げた。スタッフは若い人が多く，活気に満ちている。年配のサーバーがいる店もいいが，こういう学園祭ノリの店もなかなかよい。まず，おしゃれだ。この若干くたびれたおっさんには似合わないかもしれない。ま，そんなことはお構いなく，1 人静かにすみっこぐらし状態でビールを楽しむ。ゆっくり飲もうと心がけていたのに，いつのまにかグラスは空になっていた。スタッフに

「再一杯？」

と聞かれ，本当はビール名を指定してオーダーしたかったのだが，いかんせん，中国語は怪しいし，ドイツ語らしい文字は全く読めない。フランス語ならまだいけたのだが・・・いや，嘘です。見栄を張りました。無理です。わずかな挨拶くらいしかできません。というわけで，番号でオーダー。白い T シャツにデニムパンツのスタッフは笑顔で，

「好，No.5」

と，オーダーを通してくれた。本当にホスピタリティあふれるスタッフたちだ。

結局，3 杯飲んで，明日もあることだからと，店を出た。勝手に台中での行きつけに認定した。

思考力と体の動きが，若干低下しているのを感じていたため，タクシーで帰ることにした。ホテルの名前は正しく発音できる自信がないが，ホテルのカードは確保してあるので，それを見せて行き先を伝える。それほど遠くないので料金は当然それほど高くはないはずだ 100NT$以下だと推測した。血中アルコール濃度は微量に増加していたものの，運転手がメーターを作動

させたことや周りの景色で正しいルートを通っていることを確認しつつ，抜かりなくタクシー乗車の時間を過ごした。推定した時間，推定した料金に近いところでホテルに無事到着した。釣銭を受け取り，運転手に礼を言って降車した。どこでどのような状態であっても礼儀を忘れないのが日本人としての矜持である。

まだ，2100 前だったが，もうシャワーを浴びて寝てしまおう。就寝ルーティンに気持ちをセットし，行動を開始した。一連の手順を終えた後，ふと思い出した。いかん，明日の夕食は集合して報告会だった。今は 2200 まだ起きているだろうか。さっそく SNS で連絡した。

佐「みんな，今日はどうだった？」
芽「いろいろ勉強になりました。」
小「台湾の友達がたくさんできました。」
ゆ「歴史の勉強したくなりました。」
す「いろんなもの食べました。」
佐「いいね。明日も自由行動だから，いろいろ冒険してください。ところで，明日の夕食は飲みに行きませんか。」
ゆ「いいですね。」
芽「ちょっと行ってみたいと思っていました。」
小「すこしだけなら。」
す「いきます。」
佐「どんなのがいいかな。」
芽「最近は，クラフトビール好きです。冒険学校で飲んだクラフトビールは美味しかった。」
佐「今，台中はクラフトビールが熱いらしい。」
芽「そうなんですか。」
佐「台湾で最も勢いのあるクラフトビールメーカーの一つ，『臺虎精釀（タイフ・ジンニャン）』という醸造所の直営店『啜飲室台中（ツオインス・タイチョン）』があるので，どうですか。」
ゆ「これはいくしかないですね。」
小「でしょ。」
す「だね。」
佐「では。明日，1800 に『台虎精釀啜飲室』に集合で。」
芽「はい。」
小「わかりました。」
ゆ「好。」
す「知道了。」
佐「おやすみなさい。」

2215 こうして夏旅の 3 日目は静かに終わっていった。

DAY5（17AUG2022）終日自由活動

（芽衣の冒険）

芽衣は一人で台中文化創意産業園区に向かっていた。1 人で行こうと決めたのは，折角だから大冒険したいと思ったからだ。それに，自立した女性になるためにはこのくらいできなければとも気負っていたのかもしれない。よく言われるが芽衣は，柔らかな雰囲気の反面，かなり自立心が強く，こうと決めたらやり抜く芯の強さを持っていた。昨日の交流会で台湾の学生でネオの次にリーダー的な存在であったジャスミンと行動することを自然に決めていた。誘おうと声をかけたタイミングが同じで二人とも吹き出してしまった。

宿泊しているホテルから待ち合わせの台中文化創意産業園区まではなんと徒歩で行ける距離だった。ジャスミンが気を遣ってくれたのだろう。台北の松山文創園区，高雄の駁二芸術特区と並ぶ台中の文化・芸術スポットといわれる，台中文化創意産業園区（台中文創園区）。この台中文創園区は，以前は日本統治時代の 1916 年に建てられた酒造工場で，様々な変遷を辿り，創建から 100 年以上の時間を経て，アートスポットに生まれ変わったと言われていた。この場所では各種の展覧会やイベントが行われ，台中の文化を発信する中心となっているところだ。

SNS で連絡を取りながら，台中文創園区の道路に面した入り口らしい広場の辺りで待ち合わせた。ジャスミンは既に来ていて，笑顔で手を振ってくれた。

「ごめんなさい。待たせましたか？」

「大丈夫ですよ。今来たばかりです。昨日はいろいろお話できてよかったです。今日もいろいろお話しできたらうれしいです。」

「こちらこそ，お願いします。」

2 人は歩き出した。

この旧酒造工場の倉庫群が現在はギャラリー

になっていて，企画展などが多く開催されていることがうかがえる。そうでなくても，倉庫内外に現代アートが多数展示されていて楽しい。芽衣は，アートには関心が高いが，ここのアートは美術に詳しい人はもちろん，詳しくない人でも十分楽しめると感じていた。

こんなに楽しいアートが特別展を除き，無料で見られるなんて本当に楽しい。少し陽が落ちて，ライトアップするともっといい感じになるなぁと考えつつ，今度来るときには夕方から夜にかけて来ようと決意していた。ジャスミンと作品の感想を言い合いながら，それと言語交換をしながら，歩いた。

「次は，少しいい市場に行きましょう。」

「えっ，いい市場？」

「そう，台湾で最初にできた新しいタイプの市場です。」

「おもしろそう。行きたい。」

ジャスミンは普段，バイクに乗っているが，台中中心部までバイクで来るのは大変なので，バイクは下宿に置いて，今日は鉄道で台中中心部に来たという。それで，バスで行くことにした。都合の良いことにバス停も近いし，経路もほぼ直線だった。

1140 バス停「台中車站」発　325 バス

1150 バス停「科博館前」着

そこから，少し歩くと，「第六市場」に到着だ。ここは，台中金典酒店というホテルの中にあるデパート。そして，台湾で初めてデパート内につくられた市場だという。一言で言えば，おしゃれで清潔な雰囲気の市場，というかデパート内の地下食品売り場といった感じだ。圧倒的な違いは，デパ地下は当然地下にあるのだが，ここの市場は３階にある。台湾の市場はもっと雑然としていて，活気があるというイメージだったが，見た感じは日本のデパ地下とそれほど変わらない感じだ。ただ，熱気というか熱意というか台湾の人々のエネルギーが満ちていると感じた。よくみるみると，食品売り場かと思えばそうでもない。それ以外の雑多なまさに雑貨という言葉がそのまま当てはまる店がひしめき合っている。その一つ一つが台湾らしい強いエネルギーを発している。屋台的なコーナーもたくさんあり，ジャスミンはここで昼食にしようという考えのようだ。どこにしようかと迷ったが，台湾バーガー「刈包」に決めた。もちろん，こちらにも黄色と赤のシマシマピエロもいるし，蛾のバーガーって何？と誤解するような日本原産バーガーだってある。さらに王様バーガーだってあるが，台湾バーガーもあるのだ。この台湾ではバーガーを「刈包」という。そして，この市場にある「刈包」（店名は「熊の食」）がかわいいのだ。

バーガーがかわいい熊の手形になっているのが素敵だった。そんなかわいい熊さんの手をかじるとはどういう趣味なんだとも考えなくもないが，そのあたりの感想は完全無視だ。中身は牛肉，鶏肉などいろいろなものが選べ，野菜もしっかり入っている。バンズはもちもちした生地で，台湾風といった感じだ。それほど大きくなくて，他にも色々食べたい状況には最適だ。それと「熊の食」に来る前に買った「美軍豆乳氷」という飲み物。美軍といえば，アメリカ軍のこと？なんで，米軍が豆乳を？とも思うが，そんな細かいことは気にしない。ここの豆乳は台湾産の大豆を使って豆乳や豆花などをつくっているらしい。イチオシは「黒糖水豆花+タピオカ」らしい。豆の味が濃くて美味しいとのことでそれをもって「刈包」の店で熊の手バーガーを食べる。味も量も大満足の昼食だった。さっきまでいた台中文化創意産業園区（台中文創園区）では建物の中に入ったり，日陰を選んで動いたりしたが，かなり暑かった，しかし，ここに入るととても涼しくて快適だ。ジャスミンは体調も考えてくれていたのだろう。その気遣いがうれしい。

デパートを見て回るのは嫌いではないどころか，好きなので，色々見て回り，ついつい雑貨など買ってしまった。

1402 バス停「科博館前」発　70 嶺東科技大學(永春南路)行

1406 バス停「東興停車場」着

ジャスミンが次に案内してくれたのは「幻覚博物館台中」錯視効果を利用した、不思議な展

示の数々をみることのできる博物館。何とクロアチアが起源だという。クロアチアといえば，サッカーが強いとかバスケットボール選手も輩出しているとか，ジブリ作品「紅の豚」，「魔女の宅急便」の舞台になったアドリア海の真珠ドゥブロブニクという都市がある国とかくらいしか知らなかった。そのクロアチアがこの幻覚博物館も発祥だなんて。

中に入ると，もうインスタ映えしまくりな展示が山盛り。ジャスミンといろいろな写真を撮りまくってインスタにアップしてしまった。

1511 バス停「忠明国小」発　No.79Bus

1514 バス停「忠明南向上路口」着

最後にジャスミンがつれていってくれたのは，「緑光計画」。建物は長く放置されていた「台湾自来水公司（水道局）」の旧職員住宅だという。それが個性あふれる工房や店舗に改造され、台湾クリエイターの理念を広める場となっているとのこと。同様なリノベーション地区は他にもあり，それを手掛けるグループのテーマは「グリーン覚醒、記憶の継続、創作への情熱と夢の相乗」で、芸術、人文、創意を三本柱としているらしい。エリアの中に踏み込む。緑が豊富に配置されている。建物と闘うでもなく，完全に一体化するでもなく，包み込むように共生している感じが心地よい。古い赤レンガや装飾、タイルなど、長く放置されてしまっていたものを大切に再生している。木漏れ日差し込む中庭，路地，光さえも計算されつくしたかのような風景。まさに「緑光計画」。すぐそばには、高層ビルなど数多くの開発が進んでいるもののこのような空間がのこされていることに、いや，残していこうとする意志に感心する。

数あるカフェの１つに入った。ジャスミンといろいろなことを話した。台湾に来ることになったきっかけや野外活動のこと，今の学生生活のこと，covid-19 関連での制限のこと，世界情勢や環境問題，政治のことや教育のこと，本の話やこれから行ってみたい国のこと，卒業してからのことなど，本当に多岐に渡る話をした。精一杯の日本語と精一杯の中国語と精一杯の英語を交えて，お互いに考えを伝えようと知った。既に芽衣にはわかっていた。中国語を話せることが第１ではない。話したいことがある，伝えたいことがある。それが最初にある。そして，言葉の巧みさはその次。かっこいい言葉はその次の次。今は，伝えたいことが伝わればいい。それがコミュニケーションの本質だと。

「本当に今日はありがとう。」

「こちらこそ，たくさん話ができてよかった。」

「台湾のこともっと知りたくなりました。」

「また，台湾に，台中に来てください。」

「きっと来ます。ジャスミンもいつか日本に来てください。」

「行きたいです。また，会いましょう」

「再見，ジャスミン。」

「再見，芽衣。」

２人が別れたのは，まだまだ明るくて暑さの残る 1745 だった。

（小晴・ゆりの冒険）

小晴とゆりは，ネオとアリスの４人で自由活動日を過ごすことにした。

0830 小晴とゆりは，それぞれ同室の芽衣，すずが出発する前に，ロビーで待ち合わせて，ホテルを出発した。何度もバスや列車に乗ったり，コンビニに行ったりしているので，辺りの状況はかなり理解していた。無事目的のバス停を発見し，乗車することができた。

0844 バス停「台中車站」発　No.75Bus

0851 バス停「美術館」着

停留所の前が「国立台湾美術館」だ。

The National Taiwan Museum of Fine Arts（NTMoFA）はアジア一の大きさとされる。明代・清代の作品のほか、台湾やアジア諸国や世界の近代美術・現代美術を中心に収集・展示している。美術に興味のある人もない人も，台中に来たら，ぜひ見ておきたいスポットである。

シンプルな外観の美術館を見上げながら，入口へ向かう。

「おはよう。」

昨日と同じ，溌剌とした話し方でネオが声をかけてきた

「早安。」

アリスもクールだが親しみのある挨拶だ。
『早安。』
小晴とゆりも同様に挨拶を返した。
「すみません。待たせてしまいましたか。」
「大丈夫，まだ開館前だし。アリスが日本人は時間に厳しいらしいから早めに言った方がいいっていうから。私も日本人だけど，それほど時間に厳しいとは思わないけどなぁ。」
「ネオは時間に厳しいよ。いつでも時間前に来ているから。」
「アリスも時間は守るよね。」
「それは，ネオと話すようになってから。他の友達は時間にルーズな人が多い。」
ネオとアリスは普段から仲がいいようだ。
「今日は私たちが台中を案内するよ。」
アリスが開館したばかりの美術館に入っていく。この国立台湾美術館，なんと企画展以外，つまり常設展は無料の美術館なのだ。
アリスは美術に造詣が深く，展示されているものを丁寧に説明してくれる。日本語が怪しいところはネオがフォローしている。おかげで小晴もゆりも一人で見るより内容の理解が深まった。あまりにも興味深く，ついつい有料の企画展まで見てしまった。小晴はアートレベルが上昇したのを感じていた。
さて，あっという間に２時間近く経ってしまった。美術館の中ではアートに関する話題だったので，そろそろ他の話題も欲しいと思っていたところで，次の場所に移動することになった。
1050 バス停「美術館」発　No.19Bus
1053 バス停「三民林森路口」着
「台中第五市場」に到着。多くの台湾グルメが集まるローカル市場。観光市場ではないので，普通に地元の人々の台所というか食堂のようなものである。4 人はまず，暑くて喉が渇いていたので，冷たい飲み物を入手した。
「太空紅茶氷 Since1966」大空ではなく，太空。つまり，宇宙という意味。宇宙紅茶氷？とかいう意味になる。冷たくて甘い紅茶が本当においしい。カップの上にはフィルムが張ってあり，そこにストローを差して飲むのだが，そおっと差すのではなく，一気に刺さないとフィルムを貫通しないのである。アリスもネオも何気なく，一気に突き刺していたが，小晴もゆりも思い切りいけず，意外と苦戦してしまった。それでも，無事飲むことができて，ほっと一息ついて市場を見て回った。たくさんの食べ物がある中，ふと小晴の目に留まったのが「阿彬燻肉飯」。台中名物の燻肉飯。豚の角煮が乗せられたご飯。これは美味しいに違いない。どうしようかと迷っていた。しかし，アリスとネオは素通りしてしまった。そんなアリスとネオが提案したのが，「古味清蒸肉圓」。「肉圓」はロウユゥェンと読むが，台湾語のバーワンでも通じる。台湾Ｂ級グルメの一つ。地方によっても味や中身の具が異なる。「千と千尋のお父さんとお母さんが食べていたやつ」という説もある。だからどうというわけではない。しかし，アリスとネオは，これってさ，という話からジブリ飯の話になり，肉圓を食べることにした。確かにこれは千と千尋に出てきたものだなぁと思いつつ，あんかけの肉入り薄皮まんじゅうのような食べ物に挑戦してみた。意外と優しい味でおいしかった。なかなか日本では食べないというか，思いつかない食べ物だ。量も多くなくて丁度良い。
「本当に地元の人の食堂って感じだね。」
「そうなの。台湾の人は外食が多いから，私も外食がほとんどなの。」
ネオはもうすっかり台中の住人になっているようだ。
「でも，あまり高くないし，おいしいからいいですよね。」
「そこがうれしいよね。ただ，おいしくて太るのが心配。」
「それ，思います。既にかなり太ったと思います。」
「だよね。」
隣では，ゆりとアリスが中国語多めで話をしている。小晴も中国語は勉強したが，ゆりほど話せるかはちょっと自信がない。それでも，ネオと話すときできるだけ，中国語に挑戦してみようと思う。
なんてことはない話をしている間に，次の目的に行くことになった。

「まだ，お腹は大丈夫だよね。」
　アリスが聞く。
「もちろん。いろいろなものを食べたいです。」
　ゆりが食い気味に答える。
「次は，小龍包のお店だよ。」
　アリスが先導して，また，バスに乗る。
1234 バス停「忠孝国小」発　No.99Bus
1236 バス停「栄薬局」着
「沁園春」（シンユエンチュン、Shenyuanchun）蒋介石も台中に来るたびに食べに訪れたと言われている。1949 年開業と歴史ある小籠包の店。ここの小籠包の特徴は 1 粒 1 粒が大ぶりで、中にスープがたっぷり入っていること。皮は薄皮でスープと餡の旨味も十分に味わえることだ。値段もそれほど高くはない。
「やっぱ，台湾に来たら小龍包食べとかないとね。」
　小晴は期待感が上昇していた。
「ここは有名なお店なんだよ。」
　ネオは地元民のような言い方で少し得意げだ。
　お昼過ぎで，既に店内は混雑していたが，ネオが予約していたらしく，すぐ店内に案内された。有名店らしく，広い店内は活気に満ちていたが落ち着いて食事ができそうな雰囲気だった。人数が多い場合は 2 階で 10 席程度の円卓を囲むらしいが 4 人だったので 1 階のテーブルに案内された。小龍包各種，蒸餃子各種，煮こんだ豚肉，野菜炒めなど，いろいろ頼んだが，4 人なので大丈夫だ。やはり，大勢で来るといろいろなものが食べられてうれしい。
　店舗の移り変わりが激しい台湾で長年残ってきたことが納得できる味は感動的ですらあった。日本人の口にも合う優しい味だった。寧ろ日本の味の方がキツイ味なのではないかと思うくらいだった。
「おいしかったね。」
「さすが老舗だね。」
　小晴もゆりも満足していた。
「そういってくれると，私たちもうれしい。」
　やはり，ネオは台中人メンタルになっているのだろうと小晴は心の中で微笑んでいた。
「さ，次はスイーツでしょ。まだ入るよね。」
　アリスが張り切っている。
「もちろん，スィーツは別腹だから」
「スィーツ行こう！」
　ゆりと小晴も張り切った。
　「沁園春」から歩いて 2 分くらいのところにバス停はあった。
1351 バス停「彰化銀行」発　No.37Bus
1405 バス停「忠明西屯路口」着
　バス停から歩いて 4 分ほど，緑豊かな遊歩道とレストランが点在するおしゃれな雰囲気の街並みの区域。小さな路地を入るとなぜか急に，多くの人々の行列ができている。ここがアイスカキ氷屋さん「路地・氷の怪物（台中店）」だ。「路地」のアイスカキ氷には 1 つにつき，2 種類トッピングを選ぶことができる。店構えは和風で，メニューにも白玉やほうじ茶があった。もちろん，台湾ならではのメニューが盛りだくさん。「百香果芒果醤」はパッションフルーツとマンゴーのジャム。「桂花蜂蜜凍」は金木犀とハチミツのゼリー。女子に人気なのも頷ける。
　小晴，ゆりの 2 人はそれぞれネオ，アリスのアドバイスを受けながら注文を終え，その時に受け取った紙に書かれた番号の席で待った。席は二階で，とても落ち着いた雰囲気の店内で心地よい。
　さて，ついに注文の品が届き，初めて「氷の怪物」の意味を理解した。まさに怪物。アイスかき氷のボディに大きな目玉が 2 つ。かわいいその目がしっかりと見つめてくる。
『うわぁ。』
　4 人とも思わず，歓声を上げてしまった。実はネオもアリスもここに来るのは初めてだという。さっそく撮影会が始まり，溶けない内にということでいただく。「雪花氷」と呼ばれる氷そのものに練乳が入っているようなミルキーな味わいのかき氷。だから，アイスかき氷というわけだ。ふわっとした食感とともに，口いっぱいにミルクの甘さが広がる。トッピングの味わいも相まって，極上のスィーツといってよいだろう。暫し，幸せに浸りつつ，食べていたが，話は世界情勢とか，女性の人権とか，若者の未来とかなかなかハードな内容に突入していた。小

晴はネオやアリスが明確な目標と足が地に着いた思考をもっていることに感心していた。自分はここまで現実的な思考で未来を見据えているのだろうか。何かにあまりにも未来はぼんやりしていなかっただろうか。日本のこと，世界のことを考え，影響を与えるような人間足りうる努力をしてきたか。影響を受けやすいがこの素直な考え方を大切にしていきたいと思った。

スイーツの甘さに対して，それほど甘くない現実について考えさせられていた。しかし，小晴もゆりもそのことを楽しんでいた。

気がつけば，2時間もここで話していた。大学の講義は90分だが，時に3時間くらいに感じることがあるのに，この2時間はあまりにも濃密で積極的で考えた成果，1時間にもならないくらいの感覚だった。

「次の場所に行こう。」

アリスが気分を変えるように言った。みんなを率いて，先ほどのバス停に向かった。

1643バス停「忠明西屯路口」発　No.45Bus

1655バス停「台中医院」着

そこから歩いて5分くらいのところにあるのが，「春水堂創始店(台中四維店)」」だ。

日本のタピオカミルクティーブームは一段落しただろうか。まだ，新しいタピオカミルクティー屋が次々とオープンしているだろうか。台湾ではもう定番の人気商品だが，この春水堂は「タピオカミルクティー発祥の店」らしい。真偽のほどは不明だが，創始店と名付けられるくらいなのだから，真実であろう。徹底した品質管理と防腐剤不使用の無添加でつくられたタピオカ。そして、伝統的な製法を守っているとのこと。さらに，鮮度保持のため製造過程はすべて低温状態で行われているとか。そんなタピオカミルクティー逃すわけにはいかない。という考えから，今日の締めとして，この店がチョイスされたわけだ。

「へぇ。そうなんだ。すごいね。」

「確かに，元祖の味がするね。」

などと，小晴とゆりは口々にいっていた。

ストローを差したタピオカミルクティーのカップを持ってバス停に向かいながら，4人はとりとめのない話をしていた。ミルクティーを飲み干すと，バス停近くのゴミ箱にプラカップを捨てた。

「写真撮ろうよ。」

写真なら,今日一日何かにつけて散々とった。それでも小晴はこの時に写真を撮りたかった。みんなテンションあがりまくった笑顔で撮った。それぞれのスマホで撮った。台湾の友達の連絡先が一気に増えていた。これからは離れていても，世界のどこにいても，こんなことをしたとか，あんなことをしたとか，連絡を受け取ることができる。もちろん，こちらからも発信するだろう。ゆりは嬉しいんだか，悲しいんだか判らなくなっていた。なんだか複雑な気持ちだった。

バスが来た。

「本当にありがとう。いつかまた会いましょう。日本にも遊びに来てね。」

「台湾の友達がたくさんできてうれしかった。今日はありがとう。また，台湾に来るから。」

小晴もゆりも自分の声が湿っているのを感じていた。

2人はバスに乗り込んだ。急いで着席して窓を開けると，

「謝謝，再見」

と，繰り返した。

ネオとアリスが，微笑んで見送ってくれた。バスが走りだし，2人の姿は少しずつ小さくなっていった。

（すず香の冒険）

すず香はまだ迷っていた。本当に行っていいのか。本気にしていいのか。台湾の男性はとにかく優しいから気を遣ってくれただけかもしれない。そんなことを考えながら，待ち合わせの場所に向かって，バスに乗っていた。昨日の8人での西螺延平老街見学の時,ルークから明日,2人で会わないかと誘われた。他の人に聞かれないように見られないように耳元でそっとささやかれた。流れで，SNSでつながり，中国語の漢字は打ち込めないので,英語でやり取りした。もちろん,他のメンバーには知られないように。

ちょっといいなと思っていたので，うれしかったけど，いきなりこんな風に誘う？遊んでる？からかってる？積極的すぎない？ここまでの急展開は完全に想定外だったので，どう受け止めていいのか，本当に迷った。でも，素直に行こうと決めた。昼間だし，変なことはされないと思うし，迷い，戸惑い，恐れも少し。でも，こうして彼の待つ場所に向かっている。バスは40分ほどで台中國家歌劇院に到着した。待ち合わせの1000にはまだ時間はあったが，結局早く来てしまった。玄関ホール脇のガラスに映る自分を見た。大丈夫，おかしくない。台湾ガールにならって，メイクは控えめにした。服装は彼女たちのように派手に生足を出す勇気はなかったけれど，少しだけ短めで涼しげなスカートを選んだ。悪くない。

いくらなんでもまだ来てないよねと思いつつ，玄関ホールから入ると，顔を上げたルークと目が合った。ぱっとはじけるような笑顔，男性に対して失礼だろうか，正直かわいいと思った。

「すず，来てくれてうれしいよ。」

「誘ってくれてありがとう。」

「まだ，もう少し時間があるから，中を歩かない？」

「うん。」

二人は，書店やショップ，カフェなどが運営されている館内を巡った。カフェに入るほどの時間はなかったが，観劇の他にも楽しめるスポットがあることが分かった。

「すず，そろそろ席に座ろうか。」

「うん。」

すず香は自分がいつもより緊張していることを楽しんでいた。海外でこういうのも悪くない。

演劇の言葉はあまりわからなかったが，ストーリーは十分追えた。語学はちゃんとやっておくものだ。努力の甲斐があったというものだ。

観劇の後，カフェで昼食にした。ルークは照れてしまうほど，紳士だった。日本ではこんな扱いされたことがないほど，お姫様扱いだった。それが，全然キザでも嫌味でもなく，ただただ心地よかった。

日本での生活，台湾での生活，学生たちの話題。ルークは都市計画やリノベーションに興味があると言った。熱っぽく語る彼の話を聞くのは楽しかった。日本語も上手だし，コミュニケーションに障害はなかった。

楽しい時間は本当には早く過ぎてしまうもので，他のメンバーとの待ち合わせ時刻が近づいてきていた。

「ルーク，私そろそろ行かなきゃ。」

本当はメンバーとの待ち合わせも蹴って，ルークと夜までいたいと思った。連絡だけ入れれば大丈夫だろう。明日の朝は８時過ぎに出発だと言っていた。朝までだって。佐伯さんに怒られることはないと思う。あの人はその辺りは自己責任でと言ってくれるはずだから。でも，そこまで大胆には慣れなかった。

「あぁ，そうだね。」

「ルーク，連絡するね。」

「うん。」

「日本に帰ってもルークのこと忘れない。もっと中国語を勉強する。日本に来てくれたら，今度は私がどこかに連れて行く。それから・・・。」

「すず，僕ももっと日本語を勉強する。いつか，日本に行くよ。」

ルークがハグをしてくれた。すずもしっかりと背中に手を回した。

「本当にありがとう。ルーク」

「再見，すず」

「再見，ルーク」

バスが来た。すず香は仕方なく乗り込みかけた。そのとき。

「シェシェ，すず，ウォシーファンニー。」

最後は聞き取れたが，日本語訳はまだできなかった。強引に引き止めないところも，ルークは紳士だった。ルークは小さくなって見えなくなるまで見送ってくれた。

（佐伯の旅）

0630 今日は完全フリーの日なので，早起きする必要もないのだが，朝食を食べそびれるのも残念だし，休養日も必要だが何もしないというのも更に残念なので，早起きしてしまった。

0700 モーニングルーティンを終え，レストラン

に向かう。メンバーの誰にも会わなかった。それぞれの計画に沿って旅を楽しんでいることだろう。旅も今日で半分だ。もしかしたら，疲れがたまっている子もいるかもしれない。朝食は取った方がいいが，ゆっくり休んでほしい。とにかく，夏の台湾は昼間活動するのには向いていない。暑すぎるのだ。既に５月ころから肌を刺す日光は凶悪だ。意識して水分補給をしなければ，あっという間に脱水症状だ。もっとも，街には各種飲み物ショップが多く存在し，建物の中は寒いくらいなので，少し意識していれば特に問題はない。

基本的にノープランなのだが，実は少し遠いところにある水族館に行こうとぼんやり考えていた。しかし，何と 2022 年開業予定だったその水族館「台中海生館」は，2023 年開業に変更されてしまったのだ。行っても営業していないが，あまりにも残念なので工事の進捗状況くらい確認しておきたいとも考えた。が，しかし，虚しさが増すだけだろうということで結局断念することにした。

どの国を旅しても，博物館，科学館，水族館などの科学関連施設にはいくようにしている。その国の歴史，動植物，科学に対する考え方などを知ることができるからだ。もちろん，自然科学に対する自分の研鑽を積むこともできる。

メンバーの動きも気にはなる。しかし，今日は完全フリーの日だ。一緒に動いてもいいけれど，できれば単独行動がいいと伝えてはある。話の通じない異国での単独行動，ドキドキ感満載である。単独行動は若干の危険性も含んでいるが，昼間であるし，大丈夫だろう。２人に１台ルーターもあるから完全に一人にならなければ，連絡は取れる。駅や公共施設などでは Wi-Fi がつかえるので，そこでならつながることもメンバーは理解しているから，連絡手段はある。ただ，保護者ポジションをとっている身としてはやはり心配ではある。今日はおそらく，各メンバーからは活動報告がいくつも入るだろう。そんなことを考えながら，朝食を適切な分量で終え，出発準備を整えた。

0800 ホテル出発。コンビニによって，水を補給。徒歩 10 分ほどのバス停へ移動。

0808 徒歩 4 分で，バス停「新時代購物中心」からバスに乗車。

0819 バス停「中正国小」着。

0830 徒歩 600m で国立自然科学博物館到着。

国立自然科学博物館は外せない。見学地だ。おそらくメンバーの興味を引くことはないだろうが，こちらは理科大好きでここまで生きてきたと言っても過言ではない。物心ついたときから自然科学に対する興味は高く，文献調査（図鑑をいつも見ている。），フィールドワーク（野山で遊び，動植物と触れ合いまくる。）をしていたので，もちろん，科学館，博物館，水族館は大好きである。動物園は若干好きレベルが下がる。理由は臭いからである。もちろん，動物に興味がないわけではないが，臭くない方が圧倒的に好きである。というわけで，国立自然科学博物館である。ここは，広大な敷地に，科学センター，プラネタリウム，生命科学部門，人間文化部門，地球環境部門があり，さらに植物園で構成されている。博物館の研究収集物は，動物学，植物学，地質学，人類学の部門で多岐に渡っているとのこと。

もう片っ端から，全部参観すべしという感じで，順に見ていった。興味深い収集物，工夫を凝らした展示，言語がわからなくても基本的な内容はすでに知っていることなので，何を言いたいのかはわかる。当然のことながら，詳しい説明で一部わからないところもあるが，そこにはこだわらず，集中して見学していった。

ふと，前方にいた女性に目が行った。偶然，彼女も振り向いたので，目が合う。

「えっ，シャイニー？」

彼女は台湾在住のときに，仲良くしてくれた女性だ。しかし，台中にはいないはずだ。それに，あれから何年も経っているから，いくら何でも目の前の女性は若すぎる。

女性は，はぁ？という感じでこちらを見ている。

「あっ，ごめんなさい。知り合いに似ていたもので，声をかけてしまいました。」

ここは台湾だ。日本語が必ずしも通じるわけ

ではない。それに，この言い訳，いや言い訳ではない。知り合いに似ているのは事実だ。しかし，どう考えても下手なナンパとしか判断されない。いやいや，そういうキャラじゃないんですけど。もう全く整理されない状態で，なんとか説明しようとするのだけれど，適切な言葉は出てこない。困って言い淀んでいると，

「日本語少し話せます。」

思いがけない返事が返ってきた。

「あ，あぁ，以前，高雄に住んでいたことがあって，そのときの知り合いにあなたが似ていたので声をかけてしまいました。」

「それは，さっき聞いたので，わかりました。」

そうだ，それはさっき話した。いや，あとは何を説明すればいいだろう。いやぁ，困った。完全にナンパか，不審者として扱われても仕方のない状況になってきたな。

「あぁ，そうですね。決して怪しいものではありません。ナンパとかそういうものではないんです。」

怪しいものではないという奴が一番怪しいというのは万国共通であろう。いちいち言葉の選択を間違ってしまう。

「ナンパとはなんですか。」

「ナンパとはですね。男性が初対面の女性を口説いて誘ったり，連絡先を交換したりしようとする行為のことです。」

いやいや，何を解説しているんだ。そういうんじゃないってことを説明するのが本論ではないのか。

「ガールハント，ピックアップのことですか。」

「ナンパとはそういうことです。しかし，私はそういう目的で声をかけたのではありません。」

「今，何をしていましたか。」

何？何と言われても，博物館の見学だが？

「日本では理科を教えていて，自然科学に興味があるので見学をしていました。」

「私も科学に興味があります。日本語の学習もしています。」

奇跡的に不審者扱いはされていないようだ。日本でこの状況なら，不審者通報されなかったとしても，冷たい視線を浴びながら逃げられていただろう。いや，別に追いかけやしないけど。逃げることはないだろうよ。

「それで，日本語が上手なんですね。」

「まだまだです。まだ学習を始めてから１年しか経っていません。」

なんですと。１年でここまで話せるのか。確かに台湾に来て，英語も日本語も話せる人によく合うが，恐ろしく短期間で会話が成立するほどの上達をしている。日本ではこうなる例はすくない。原因は現場で使うかどうかというところにあると思われる。間違ったって特に問題ない。まずは話してみることが大切。わからなかったら，聞けばいいという積極性が上達の差につながってくるのではないだろうか。以前会った台湾の人は日本のお笑いで日本語を覚えたらしく，恐ろしく流暢な関西弁を操っていた。これには日本人学校の同僚であった関西出身者も驚いていた。

「私は劉雅玲（リウ　ヤーリン）といいます。グレースと呼んでください。時間があれば，見学しながら日本語を教えてくれませんか。」

出た。イングリッシュネーム。台湾や香港ではイングリッシュネームをもつ人が少なくなかった。日本人学校の生徒でも持っている生徒は何人もいた。保育園のときに英語の先生に付けられたと教えてくれた生徒がいた。その生徒は普段はそれほどその名前を使うことはなかったが，台湾や香港の人は名札にもそのイングリッシュネームが付けられている場合があった。それにしても急展開である。不審者どころか逆に展開した。こちらも台湾の中国語を実践的に学びたい気持ちはある。しかも，自然科学分野の単語を中国語で学べるというのは貴重だ。

「いいですよ。私も台湾の中国語を学びたいと思っています。私は佐伯順弘（ツォーポン　シュンホン）と言います。サエキと呼んでください。」

ほっとした気持ちと盛り上がる気持ちがないまぜになった状態の中で少し考えた。待てよ。こっちがピックアップされたのか？いやいや，場所が場所だしな。何も自然科学博物館で逆ナンはないだろう。しかもこっちは逆ナンかけら

れるほど若くはないぞ。いやいや，そのような浅ましい発想は心が荒んでいる証拠だ。ここは純粋に語学練習に励む学生の手助けをするという設定でいくしかないだろう。中国を旅行した時も，タイを旅行した時も日本語の勉強をしているという若者集団に声をかけられたことがある。(いずれも４人組) 基本的に声をかけられやすいオーラがあるのか。しかし，そのときは，学生もしくは教員になってから間もないころだった。今もそうであるならどんだけ威厳がない奴なのか。そんなことも頭の片隅で考えつつ，グレースと一緒に見学を始めた。

「サエキさんと呼んでいいですか。」

「はい。」

「私はグレースと呼んでください。」

「はい。台湾では老師 (ラオス―) にも『さん』とかはつけないと聞きましたが。」

「日本では年上の人には『さん』をつけますね。だから，つけて言います。」

「グレースさんと言った方がいいですか。」

「そういう言い方はなれないので，グレースでいいです。」

「わかりました。」

展示について日本語で何というかを説明したり，展示で意味が分からないところを日本語で説明してもらったりしながら，展示を見学した。その中で彼女のことも教えてもらったが，何と4人のメンバーが訪問した環球科技大学 生活応用学群 バイオテクノロジー学科　３回生だという。グレースはゆるふわのミディアムで少し明るめの髪色，台湾のファストファッションショップ「NET」で買ったＴシャツにショーパン，サンダルという台湾の若者ファッションが似合う女性だった。台湾女性に多く見られるノーメイク，それでいて名前の通り優雅な感じの女性だ。実は自分の卒業した大学の後輩たちがcovid-19の影響で環球科技大学と交流するはずだったのだが，行けなかったので，個人的に旅行する手伝いをしているのだと説明すると，とても驚いていた。こちらもびっくりである。彼女は自然科学に興味があるが日本にも興味があるので日本語はほぼ独学で学んでいるとのことだ。独学でここまで話せるとはやはり台湾の学生がよくやる「とにかく使う」学習法のおかげなのだろう。今回のように，一歩間違えば危険人物である可能性のある人間に声をかけてさえ学ぼうとする態度こそがこのスキルを高めているのだろうか。

旅日記とともに，旅には欠かせない筆談メモに時々中国語を書いてもらい，それにフリガナをつけて発音を記録していった。グレースは字も名前の通り優雅だった。彼女の自然科学についての知識はなかなかのものだったし，日本への興味もかなりのものだったので，ずっと話しっぱなしだった。本当にみっちり自然科学と中国語を勉強させてもらった。こちらの話も彼女のためになっただろうか。科学用語を日本語に言い換えるのはまだしも，自然科学のしくみなどを英語と日本語を交えて話したが十分通じたのだろうか。ちなみに英語力は残念ながら彼女の方が上だった。

豊かな時間はあっという間に過ぎて，既に正午を回っていた。若干，空腹を覚えたので昼食に誘ったらOKしてくれた。館内にある赤と黄の縞模様ピエロのバーガーショップでとりあえず空腹を満たそうかとも思ったが，台湾らしいものを選びたくなり，外で探すことにした。その前に，ミュージアムショップに寄らねばならない。ミュージアムショップの善し悪しは博物館そのものの評価に大きな影響を与える。今後も学習を続けたくなるようなものを手元に置くことは子供であっても大人であっても重要なことだ。化石の標本と博物館のカタログとDNAを模したキーホルダーを購入した。満たされた気分で，国立自然科学博物館を出ると，北側に飲食店を見つけた。それは，なぜか台湾の旗を掲げた店だった。

1300その怪しげな店，陸軍小館にて昼食を摂ることにした。台湾陸軍とどのような関係があるのかわからないが，面白そうなので入ってみる。陸軍牛肉麺（並）145NT＄を２つと青菜炒め80NT＄を注文。ほどなく届いた料理は何の文句もなく安定の旨さで満足する。台湾女子を誘うのにもっと気の利いたところはなかったのか

と思わないでもないが，あくまでもナンパではないのだ。そこははっきりさせておく。しかし，年長の立場からここは払っておく。とはいっても 1500 円前後だ。学問的にも胃袋的にも精神的にも満たされた。グレースのおかげだ。話の上手な女性で，いつか日本に遊びに行きたいと言ってくれた。FB でユーザーネームを教えてくれたので検索してつながりはつくった。写真を撮っていいかと聞くと一緒に取ってくれて，彼女のスマホでも撮ってくれた。

記念にと，先ほど買ったキーホルダーを渡した。なんとグレースもキーホルダーをくれた。蝶をかたどったキーホルダー。台湾は蝶の種類が多いことでも有名である。彼女と同じことを考えていた自分のファインプレイを密かに褒めていた。

「グレース，本当にありがとう。あなたが助けてくれたので，博物館の内容がよくわかりました。」

「こちらこそ，日本語の学習がたくさんできました。楽しかったです。サエキさん，これからどこ行きますか。」

「高鐵の近くにあるビール工場に行こうと思います。」

「いいですね。ビール好きですか。」

「好きです。昨日は素敵なビアホールに行きました。」

「いいビアホールでしたか。」

「最高でした。」

「いいですね。」

グレースははじけるような笑顔だった。

「私はこれからパートタイムワーク，日本ではアルバイトといいますね。お仕事です。」

「そうかぁ，工作（仕事），加油（がんばれ）」

「謝謝，再見。」

「謝謝，グレース，再見。」

グレースが４人のメンバーともつながってくれたら，楽しいなと思いながら，バイクで颯爽と走り去る後ろ姿を見送った。バイクが交差点で曲がるところまでずっと見送っていた。ＦＢでつながっても，再び会うことはそうないだろうなぁと思いながら，ぼんやりしていた。これだけのことだとわかっていながら，心の奥が痺れたようになっているのを自覚しつつ，それには気付いていないことにしておいた。

こういった出会いと別れも旅の味わいだ。

ふと我に返る。暑い。暑すぎる。台湾の夏は本当に暑い。昼間に屋外でぼんやり突っ立っているなんて，自殺行為に近いものがある。日陰を選びつつ，バス停へと向かう。陸軍小館から徒歩 160m，2 分ほどのところにバス停「植物園」があり，ちょうどよい時間にバスが来たので乗り込む。次はビール工場だ。

1407 バス停「植物園」発，159 台湾高鐵台中站行，統聯客運。バスの中から街を眺め，街歩きならぬ街走りを楽しむ。バスに乗れば乗るほど町のようすがよくわかる。

1429 バス停「高鐵台中站」着。バス停から徒歩 1km, 約 15 分の所にあるビール工場へ向かう。基本，旅は歩きだ。気分は渡世人。ただひたすら歩いて旅から旅への人生・・・などと考えながら歩くとあっという間に到着した。

1445 烏日ビール工場『烏日台湾啤酒廠』到着。下調べが甘かったため，残念ながら，工場ラインの見学はできなかった。（平日 2 回 1000～，1400～）ビールの製造過程はほぼ理解しているので見学ができなかったとしてもそれほど，残念ではない。それに見学したところでビールの味はわからない。基本は味わうことだ。

「簡報室」という工場紹介用の部屋に向かう。ここでビデオを使った製造過程の説明があり，試飲もここで行われた。数人の台湾の人と一緒に分かった風な感じでビデオを見て，金牌ビール，生ビールをいただいた。工場で飲むとおいしく感じるのはなぜだろう。日本でも職員旅行でビール工場に行き，試飲したがやはりおいしく感じた。やはり，雰囲気や設定というのは大切だ。ビデオは日本語のも見せてくれたし，パンフレットも日本語版があったので，旅の資料として確保しておいた。見学もしたし，試飲もしたしということで，施設の外に出るとそこにはビアレストランが３つもあり，これは仲間を連れてこなければならないと小さく誓った。

台湾料理「大排檔」，串焼きの店「酒饕屋」，メ

キシコ料理「FROG　FAMILY」の３つでどれも魅力的だったが，リサーチするのは断念し，次の目的地に向かうことにした。
1541 バス停「啤酒廠美食街」発。365 國安社區(宜寧中學)行。ほんのわずかしか乗らないが，確実に場所を特定することができるので，あえて乗っておくことにした。
1548 バス停「鎮平環中路口」着。徒歩 2.2km 約 30 分。ま，30 分ほどの歩きはどうということはない。ちょうど先ほどのアルコールが抜けて都合がいい。
1620 筏子溪門戸迎賓水岸廊道に到着。
「Taichung 地標」川沿いの遊歩道になぜか「台中」の巨大な文字がつくられている。いわゆるインスタ映えする場所だ。多くの人々が当然のことながら写真を撮っている。誰もが普段なかなかやらないようなポーズをとっている。こちらの人はこういうことが多いみたいだ。家族連れてきていたお父さんと思われる人に写真を撮ってくれるようにお願いしたら快諾してくれたのはよいが，もっと大きなポーズをとれなどとポーズ指導が入り，何枚も撮る羽目になった。それはそれでありがたいことだ。もちろん，家族一緒の写真も撮ってあげた。
　さて，そろそろ 4 人のメンバーと会うためにビアホールに行こう。
1704 Taichung 地標発
1719 バス停「劉厝莊」発　290 干城站行
1736 バス停「互助新村」着
臺虎精釀啜飲室まで 120m。約 1 分。
1740 には店内に入っていた。
　昨日も来た臺虎精釀啜飲室。クラフトビールがおいしかった。日本にも神楽坂に『Taihu Tokyo / 臺虎精釀』として出店しているらしい。
　店に入り，友達が 6 人来ることを（日本語で）伝えると，6 人掛けの席に案内してくれた。まだ早いからかそれほど混雑していない。昨日は店を出るときにはかなり混雑していたから，これから人が増えていくのだろう。とりあえず，IPA とフライドポテトを注文して，SNS で既に入店したことを流す。それほど待たずに，グラスが運ばれてきた。
「また，会いましたね。」
　と，声をかけられ，サーブしてくれたスタッフを見ると・・・。
「えぇっ？グレース？」
「はい。ここでパートタイムワークです。」
　４時間ほど前に二度と会わないだろうなと思った笑顔が目の前にあった。博物館で会った時はほどいていたゆるふわミディアムを今は飲食業らしく後ろで留め，ユニフォームと思われる白い T シャツにデニムパンツをはいていた。
「昨日も来ていましたね。」
「昨日も働いていたんだ。」
「そう，博物館であったとき，昨日のお客さんだと気づきました。」
「そうだったんだ。」
「はい。じゃ，楽しんでください。」
　グレースは忙しく，仕事に戻っていった。こんなこともあるんだな。とてもいい時間が流れ始めたのを感じていた。
1800 ほとんど定刻で 4 人が入店してきた。それほど混んでいない時間だったため，すぐ席を見つけることができ，こちらに歩いてくる。
「なんか久しぶりな感じだね。」
「はい，本当にお久しぶりです。」
　なんだか，とても自信に満ちた感じの芽衣ちゃんが言った。
「この一日半，一言でどうだった？」
「いろんな旅の形があるんだと思いました。」
「台湾に留学したくなりました。」
「本当にいい時間が過ごせたと思います。」
「一生記憶に残ると思います。」
　芽衣ちゃん，小晴ちゃん，ゆりちゃん，すずちゃんがそれぞれ言葉にできない思いを何とか伝えようと話してくれた。やはり旅は人を成長させる。かわいい子には旅をさせよとはよく言ったものだ。詳しく聞きたいところではあるが，それはそれぞれが話し始めるのを待てばよいだろう。
「サエキさん，オーダーは決まりましたか。」
　グレースがオーダーを取りに来てくれた。
「あ，それじゃ，番号でオーダーして。」
　各自，気になるビールやビアカクテルなどを

伝える。サイドメニューもいくつか。
「少々お待ちください。」
　グレースがオーダーを通しに戻ってくと，さっそく突っ込みが入った。
「佐伯さん，一体どういうことですか。」
「どうして，あのかわいいウェイトレスさんが佐伯さんの名前を知っているんですか。」
「台湾の知り合いってあの子ですか。」
「佐伯さんがそういう人だったなんて知りませんでした。」
　はぁ？そういう人って，どういう人だ？完全になんか誤解していないか？もちろん，聖人君子ではないが，そこまで非難されるような行動をした覚えはない。いや，だからそういうんじゃないから。ここは冷静に説明しなければなるまい。
「なんか，誤解されているようだけど，あの子，グレースとは今日，国立自然科学博物館であったんだ。」
　と，知り合いになった経緯を丁寧に説明した。訪問した環球科技大学の学生だというくだり辺りから，雰囲気が軟化した。
「お待たせしました。」
　グレースが５つのグラスとサイドオーダーを運んできた。華奢な感じだったが，かなりの重量のトレイを軽々と操っている。
「グレース，すごい。」
「サエキさんから，名前聞きましたか？」
「私は芽衣，よろしく。」
「私はコハ。」
「私はゆり。」
「私はおすずです。」
「グレースです。皆さんが訪問した環球科技大学の学生です。サエキさんとは博物館で会いました。じゃあ，ゆっくり楽しんでいってください。」
　グレースは次のオーダーを受けに他のテーブルに行った。
「というわけなんだよ。」
　明らかに先ほどより空気が柔軟になったことを確認していた。しかし，台湾に住んでいた時仲良くしていた女性に似ていたから声をかけたことがきっかけだということは黙っておこう。ん？ちょっと待て。やっぱり，こっちから声をかけたということになるのか。いやいや，ナンパ目的で声をかけたわけではないので確実に無罪でしょ。しかし，空気は軽くなっていたし，その件に関する追加の釈明及び名誉回復などにはもう拘らなくていいのかも知れない。いや，拘らなくていいのだ。
　彼女たちの話題は，既にお互いの冒険話に移っていた。その様子を見ながら，冒険者になったばかりのことを思い出していた。なんてことのない小さな移動，小さな体験なのだと，地球レベルから見ればそう思えるのだが，自分の中では大冒険だ。言葉も十分通じない異国で，自分の判断と自分のコミュニケーションへの熱意とつながろうとする意志とで冒険を乗り切る。乗り切れたという充実感，達成感，そして自信。そういったものが語り口の端々に漏れ出してくる。いいね。そういう，冒険をくり返し，さらなる冒険へ向かうがいい。冒険は何も海外だけあるのではない。日本にも，日常にもどこにでも存在する。そういうものを深く認識してほしい。すっかり指導者目線である。しかし，優秀な指導者は余計なことは言わないものだ。求められたときのみ，的確な助言をする。そのための観察と発想の蓄積，新しい手法の模索を怠らないのだ。
　各自ドリンクをもう一度頼み，それを飲み終わる頃，2000 を少し過ぎていた。次は。台中初日に行った逢甲夜市に行こうということになり，レジに立った。今回はメンバーの冒険者への一歩を祝して，奢りだ。グレースがレジを担当してくれた。
「グレース，今日はありがとう。楽しかったよ。」
「ビアホール？それとも博物館？」
「もちろん，博物館だよ。」
「私も楽しかったです。ありがとう。」
「明日は高雄に移動するけど，また台湾に来たときには会えるかな。」
「もちろん。連絡して，FB でつながっているから…Let’s keep in touch.」
「Will do.」

なぜか，最後の方は英語になっていた。
「この店いい店だね。ごちそうさま。」
「ありがとうございました。再見。」
入り口を振り返ると，4人のメンバーの笑顔がそこにあった。
「佐伯さん，ずいぶんと楽しげに話をしていましたね。」
「今夜は佐伯さんのおごりで食べ歩きに決定ですね。」
「いやぁ，そんな悪いですよ。ごちそうさまです。いっぱい食べちゃお。」
「夜市，楽しみだなぁ」
（ここで，ひっかかってくるか？ビアホールでそこそこお腹はできあがってるんじゃないの？）
タクシーはそれほど高くないし，便利だから使いたい気もするのだけれど，２手に分かれるのが心配でできるだけ，バスを利用するようにしていた。何しろ，確実に安いのがありがたい。
冒険者レベルも上がっているし，タクシーでも構わないかと思ったが，メンバーは地図を頼りにバス停に向かっている。まあ，それでいいだろう。
2043バス停「忠明南向上路口」No.79Bus
2055バス停「福星停車場」
逢甲夜市に到着である。この夜市はかなり広く，飲食店の密集度が特に高い。１ヵ月いたとしても，いや３ヵ月いたとしてもすべての店を回るのは難しいだろう。
最初に味わったのは「溫家正宗逢甲地瓜球」。サツマイモボールといえばよいのだろうか。
「地瓜」はサツマイモという意味だ。
さつまいもを使ったタネを空気を含ませながら揚げてあり，空気を含んでいるのでとっても軽い食感で、口に入れるとさつまいも由来の甘さがある。この「地瓜球」は多くの夜市で見ることができるが，ここ逢甲夜市の人気店はというと，「溫家正宗逢甲地瓜球」だ。人気店だけあり，いつも混んでいる。並んでいる最中も辺りの店を見て，面白そうなものを探していた。さらに，お互いの冒険について話したり，質問したりして，ぼんやりしている暇などなかった。そんな風に待っているとあっという間に順番が回ってきて，メンバーは２人で１つ買い，食べている。
「うわぁ，これってなんかサクサクでおいしい。」
小晴ちゃんがうれしそうに言う。
「うん，おいしい。揚げてあるのに油っこくないし。どうやったらこんな風に揚げ物ができるんだろう。」
もしかしたら，芽衣ちゃんは学祭で出すメニューを考えていたのかもしれない。
「佐伯さんも１つ食べてみてくださいよ。」
余分についていた竹串に刺してくれた。
やさしい甘さでこれは学祭でも受けるのではないかと期待してしまった。
「確かに。おいしいね。」
次は「官芝霖大腸包小腸」だ。
簡単に言えば，パンではなくもち米ではさんだもち米のライスホットドッグである。腸詰に台湾の少し甘いソーセージを挟んだ「大腸包小腸（ダーチャン バオ シャオチャン）」も多くの夜市では定番の一品だ。網でパリッと皮が焼かれたもち米の腸詰とソーセージが香ばしい。
ここでも，１つを２人で分けて食べていた。注文の段階で２つに切ってもらうよう頼むなど，新人とはいえ，なかなかの冒険者ぶりだ。意思を素直に伝える。下手な忖度はしない。相手にとって不利益なら断られるだけだ。その場合，あっさりあきらめるだけで，後腐れはない。
日本語と中国語と手振り身振りで伝えた結果，正しく伝わったようだ。
「最初は，大腸とか，小腸とか，なんかやだなぁと思ったけど，ホットドックのご飯版と考えればいいんだね。」
すずちゃんは納得したように食べていた。
「そうそう，日本にもライスバーガーっていうのもあるし，それを考えたら，こういうのもアリかも。」
ゆりちゃんも独自の考察を加えながら味わっていた。
しかし，よく食べるなぁと思っていたら，半分だったせいもあるが，あっという間に食べ終わっていた。
さっきは奢らされるのかと思った，メンバー

は自分たちできちんと支払いをしていた。
　そろそろ，お腹一杯じゃないかと思ったら，次は「牛Ｂ糖葫芦」で一行は立ち止まった。
　台湾のフルーツ飴「糖葫蘆(タンフールー)」である。日本言うなら，お祭りの屋台でよく見るリンゴ飴である。台湾は夜市があるので毎日お祭り屋台が出ているようなものだ。台湾のそれが日本のものと大きく違うのは串が長くて色とりどりというところ。
「ねぇ，これってリンゴ飴？」
「リンゴ飴の進化版？」
「ちょっと多いね。」
「味のイメージは裏切られないと思う。」
　口々に感想を言いながら，１本ずつ入手していた。串の長さが比較的短いものを選んではいたが，かなり量はある。これを１本食べる所がすごい。スィーツは別腹といったところか。
　いくらなんでもこれで終わりだろうと思ったら，締めは「CITY MILK」。逢甲夜市発のドリンクスタンドの１つで「木瓜牛奶第一品牌」と掲げるようにパパイアミルク No.1 を標榜する。いつもお客さんで溢れていて順番待ちの状態。
　看板メニューの木瓜牛奶（パパイアミルク）をはじめスイカ、緑豆、バナナ、イチゴ、パイナップルをミルクと合わせたスムージー状のドリンクがかなりの数揃っている。
　カウンターで注文し，番号札を受け取る。→出来上がりを待つ。→番号が呼ばれたら商品を受け取る。という流れ。
　それほど，待つ間もなく，ドリンクが提供された。ここは定番のパパイアミルク一択で，同じものを頼んだ。実は高雄に住んでいた時に，有名なパパイアミルク店があったのだが，実はただの１回も行ったことがなく，これが，初パパイアミルクだったのだが，それは敢えて公表することでもないと黙っておいた。
　考えてみれば，台湾で食べたことのないものなんていくらでもある。日本でも同様で食べたことのないもの，飲んだことのないものなんていくらでもある。その地域のものを食べ尽くすなんてことはなかなか難しいことだなぁと改めて考えさせられた。
「いやぁ，皆さん，食べましたね。」
「はい。この旅の間でどのくらい体重が増えるのかある意味恐怖です。」
「みんなで，ダイエットは帰ってからの課題ということにしました。」
「そうそう，この旅の間しか食べられないものもあるので，それは食べておこうかと。」
「佐伯さんも言っていましたよね。お腹がすくから食べるのではない，面白そうなものが食べるんだと。」
「ま，そういうことだね。帰ろうか。」
　明日は移動だし，さっと帰りたかったので，タクシーにしようと思ったのだが，調べるとかなり渋滞していてバスと変わらないという状態だったので，時間が同じなら同時に移動できて料金も安いバスしかないという結論になり，結局バスで帰ることにした。
2144 バス停「頂滷仔(西屯路)」発　No.45Bus
2212 バス停「台中州庁」着
　ホテルから少し遠いところのバス停にしか降りられなかったので，15 分ほど歩く。
「大丈夫です。このくらいは普通に歩けます。」
　芽衣ちゃんは元気だ。
「そうですよ。山は何時間も歩きますから。」
　小晴ちゃんも全然疲れが見えない。
「これも丁度いい運動です。」
　ゆりちゃんも前向きだ。
「夜みんなで歩くなんて，ちょっと楽しくないですか。」
　すずちゃんは別の楽しみを発見しているようだ。
　そんなことを話しながら歩いていると，あっという間にホテルについてしまった。
「今日一日，特に活動したことだろうから，ゆっくり休んで。明日の朝は 0800 ホテルロビーに集合でお願いします。明日は高雄へ移動します。」
『はぁい。』
　こうして各自の部屋に戻り，就寝ルーティンに入っていった。睡魔と闘いつつ，旅日記と会計簿をきっちりつけ，何とか 2400 までにはベッドに入った。　　その(4)へつづく。

夏旅 2022 台湾　～アナザースカイへのお誘い～

■訪問を検討した都市，施設，活動（旅 5 日目までで行ったところは☑）

（台北）

☑台北桃園国際空港　⇔　東京成田国際空港

・故宮博物館　　世界四大博物館の一つとも言われる（諸説あり）

・中正紀念堂　　蒋介石を紀念して建てられた。「台湾民主記念堂」儀仗隊の交代儀式

・台湾故事館　　昔の台湾の街並み，庶民の生活を再現した博物館

・二二八和平公園　二二八事件関連資料を展示した二二八紀念館

・国立台湾博物館　台湾の動植物，原住民族の生活に関わる資料

☑士林夜市　　台北の観光夜市

・台北 101　　台北 101 展望台（600 元）　スカイライン 460（3,000 元）

☑九份　　「千と千尋の神隠し」的な街並み

☑十份　　天燈上げ

・淡水　　夕景が有名，洋館のある街並み

（台中）

☑彩虹眷村　　カラフルな壁画を見学

☑宮原眼科　　スィーツショップ，レストラン併設（昼食）

☑逢甲夜市　　台中最大の夜市

☑高美湿地　　高美野生動物保護区，「台湾のウユニ塩湖」とも

☑国立台湾美術館

☑国立自然科学博物館

☑環球科技大学

（高雄）

・烏山頭水庫（台南）

・西子湾　旗津　打狗英国領事館　打狗鉄道故事館　壽山景観台

・蓮池潭　龍虎塔

・三地門　台湾原住民族文化園区

・駁二芸術特区　高雄市立歴史博物館

・六合夜市，瑞豊夜市，苓雅夜市＆自強夜市　新堀江　左脚右脚

■宿泊ホテル

（台中）シティインプラス台中駅ホテル（新驛旅店台中車站店）(CityInn Plus Hotel-Taichung St.)

台中市東區復興路 4 段 133 號

TEL+886-4-22232333　FAX+886-4-22237333　台鉄台中駅 1 番出口から徒歩約 3 分

スーペリア　ツインルーム　（ベッド 2 台）シャワーとトイレ付/禁煙　朝食あり

2 人利用　6,048～18,900 円/室（1,440～4,500 TWD）1 人当たり 3024~9450 円

（高雄）PAPA WHALE-KAOHSIUNG FORMOSA BOULEVARD(高雄美麗島館))

高雄市新興区民生一路 328 号

TEL+886-7-2519888　FAX+886-7-2516777　美麗島駅中央公園は徒歩圏内。

デラックスファミリールーム　バス　トイレ付/禁煙　180×210cm　2 台　朝食なし

4 人利用　7,921～29,618 円/室（1,886～7,052 TWD)1 人当たり 1980~7404 円

■日程　予定と実際の行動　2022.8.13 - 22　ver.3

8/5 8/11	金 木	冒険学校①　6 泊 7 日 冒険学校⑦　　参加者解散，片付け　反省会	小菅
8/12	金	片付け～移動・旅行最終準備	日暮里
8/13	土	夏旅 01　移動日（成田→台北） （移動）1030 日暮里集合 1105 日暮里発→1141 成田国際空港着 （移動）成田 →（午後）台北 CX451 15:40 NRT 成田 → 18:35TPE 台北	台北
8/14	日	夏旅 02　九份・十份観光，台北観光，士林夜市 （台鐵台北車站→　瑞芳站→　十份站） 十份（十份大瀑布，老街散策，天燈上げ）　（タクシー　十份→　九份） 九份（散策）（台鐵十份站→瑞芳站→バス→九份）	台北
8/15	月	夏旅 03　移動日（台北→台中），台中観光，逢甲夜市 （移動）高鐵台北站→台中站→台鐵新烏日站→台中站 宮原眼科，台中市第四信用合作社，彩虹眷村，宝覚寺，高美湿地，	台中
8/16 ★	火	夏旅 04　台中観光 環球科技大学　台鐵台中站→斗六站→東和国中 7:56 - 9:46　（1 h 50m） 高美湿地予備	台中
8/17 ★	水	夏旅 05　台中観光　終日フリー，逢甲夜市 国立台湾美術館，国立自然科学博物館	台中
8/18	木	夏旅 06　移動日（台中→高雄），烏山頭水庫，高雄観光，六合夜市 （移動）台鐵台中站→台鐵隆田站　8:07 - 10:42　（2 h 35m）烏山頭水庫 （移動）台鐵隆田站→台鐵高雄站 16:46 - 17:57　（1　h　11　m） 七美望安，高雄市立図書館，新堀江，左脚右脚	高雄
8/19	金	夏旅 07　高雄周辺観光，苓雅自強夜市 三地門　台鐵高雄車站→屏東→三地門 8:30 - 9:59　（1h29m） 駁二芸術特区　高雄市立歴史博物館 西仔湾，旗津，打狗英国領事館，打狗鉄道故事館，壽山景観台	高雄
8/20	土	夏旅 08　高雄観光，移動日（高雄→台北），饒河街観光夜市 蓮池潭　龍虎塔 （移動）高鉄左営站　→　高鐵台北站 14:52 - 16:29　（1　h 37　m）1490 元	台北
8/21	日	夏旅 09　台北観光　終日フリー，寧夏夜市 故宮博物館，中正紀念堂，台湾故事館，二二八和平公園 国立台湾博物館，台北 101，鼎泰豊，	台北
8/22	月	夏旅 10 （移動）台北車站→桃園国際空港（TPE）8:45 - 9:47　（1 h02m） （移動）台北→（午後）成田　CX450 13:00 TPE 台北 → 17:20 NRT 成田	★解散 日暮里
8/23	火	夏旅 11 日暮里→小菅→岐阜	

・おことわり：既に理解していただいていることと思いますが，この物語は創作です。実在の人物，店舗，交通手段，及び実際の出来事などを基にしていますが，あくまでも創作であることを前提として楽しんでいただけましたら幸いです。